

秋田県文化財調査報告書第523集

代官小路遺跡

代官小路遺跡

—地方街路交付金事業(停車場栄町線:裏尾崎町)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—



2022・3

秋田県教育委員会

2022・3

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田市白坂(しろざか)遺跡出土の
「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見。高さ7cm、凝灰岩。

代官小路遺跡

—地方街路交付金事業(停車場栄町線:裏尾崎町)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2022・3

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約5,100か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これら埋蔵文化財は、県民が地域の歴史や伝統を理解し、ふるさと秋田への誇りや愛着を高めていく上で、欠くことのできないものであります。

一方、住民の生活や経済活動、地域間の交流等を支える交通網の整備、とりわけ道路ネットワークの整備は、本県にとって重要な課題の一つです。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに銳意取り組んでおります。

本報告書は、地方街路交付金事業（停車場栄町線：裏尾崎町）に先だって、令和2年度に実施した代官小路遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。調査の結果、本荘城下整備にともなう盛土整地跡や土坑等が見つかり、近世の土地利用や城下町の一端をうかがい知ることができます。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり御協力をいただきました秋田県由利地域振興局建設部、由利本荘市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

令和4年3月

秋田県教育委員会

教育長 安田 浩幸

例 言

1 本書は、地方街路交付金事業（停車場栄町線：裏尾崎町）に伴い、令和2年度に発掘調査した由利本荘市所在の代官小路遺跡の報告書である。調査内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報等によって公表されているが、本報告書を正式なものとする。

2 調査要項

遺 跡 名	代官小路遺跡（だいかんこうじいせき）
遺 跡 略 号	6DKKJ
遺 跡 所 在 地	秋田県由利本荘市裏尾崎町8-2ほか
調 査 期 間	令和2年7月6日～7月17日
調 査 目 的	地方街路交付金事業（停車場栄町線：裏尾崎町）
調 査 面 積	220m ²
調 査 主 体 者	秋田県教育委員会
調 査 担 当 者	富樫 那美（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 文化財主事） 山田 祐子（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 文化財主査）
総 務 担 当 者	大坂 真弓（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 副主幹） 小松 恵美子（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 副主幹）
調査協力機関	秋田県由利地域振興局建設部 由利本荘市教育委員会

3 本書に使用した図は、秋田県由利地域振興局建設部提供の500分の1工事図面（第5図）、及び国土交通省国土地理院発行の25,000分の1地形図『本荘』『岩谷』（第4図）である。

4 遺跡基本層序と遺構土層図中の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』2010年版に掲った。

5 本書に使用した空中写真は、株式会社みどり光学社に委託したものである。

6 理化学的分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に、木製品の保存処理・樹種同定は株式会社吉田生物研究所に委託した。また、水準測量・水準杭設置業務は、有限会社村上測量事務所に委託した。

7 本書の執筆分担は、以下の通りである。

富樫：第1章、第2章、第3章第3節、第5章 山田：第3章第1節、第2節

8 発掘調査及び整理作業において秋田県由利地域振興局建設部並びに由利本荘市教育委員会から御援助・御協力をいただいた。また本書を作成するにあたり、御指導・御助言を賜った以下の方々に記して感謝申し上げます。

利部修、小松正夫、長谷川潤一、三原裕姫子、湯沢丈（五十音順、敬称略）

凡 例

1 遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、検出順に連番とした。遺構の種類に用いた略記号は以下の通りである。 SK：土坑 SD：溝跡 SX：性格不明遺構

2 土層番号に用いた数字は、ローマ数字を遺跡基本層位に、算用数字を遺構埋土層に使用した。

目 次

序		1	発掘調査.....	13
例 言.....	ii	2	整理作業.....	13
凡 例.....	ii		第2節 基本層序.....	14
目 次.....	iii		第3節 検出遺構と出土遺物.....	15
挿図目次.....	iii	1	検出遺構と出土遺物の概要.....	15
表 目 次.....	iv	2	江戸時代の遺構.....	15
図版目次.....	iv	3	大正～昭和初期の遺構.....	23
第1章 調査の経過.....	1	4	時期不明の遺構.....	26
第1節 調査に至る経緯.....	1	5	遺構外出土遺物.....	26
第2節 調査の経過.....	1		第4章 理化学的分析.....	47
第3節 整理作業の経過.....	2		第1節 花粉分析・種実同定・骨同定.....	47
第2章 遺跡の位置と環境.....	3		第2節 樹種同定.....	52
第1節 地理的環境.....	3		第5章 総括.....	54
第2節 歴史的環境.....	5			
第3章 調査の方法と成果.....	13		図版	
第1節 調査の方法.....	13		報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図.....	3	第18図 遺構内出土遺物 S K 09・S D 10.....	34
第2図 遺跡周辺の地形区分図.....	4	第19図 遺構外出土遺物 陶器 B区・C区.....	35
第3図 遺跡周辺の地形分類図.....	4	第20図 遺構外出土遺物 陶器 分布調査.....	36
第4図 代官小路遺跡と周辺遺跡位置図.....	10	第21図 遺構外出土遺物 磁器 A区・B区(1).....	37
第5図 事業用地と調査範囲及び 水準点位置図.....	16	第22図 遺構外出土遺物 磁器 B区(2).....	38
第6図 基本土層図.....	17	第23図 遺構外出土遺物 磁器 B区(3)・C区.....	39
第7図 遺構配置図.....	18		
第8図 S K 01	20	第24図 遺構外出土遺物 磁器 分布調査.....	40
第9図 S K 03・S K 04・S K 05	22	第25図 遺構外出土遺物 土器 B区.....	41
第10図 S K 08・S K 09・S D 10	24	第26図 遺構外出土遺物 木製品・土製品・石製品 A区・B区・分布調査.....	42
第11図 S K 06・S X 07	25	第27図 遺構内出土遺物 S K 06	43
第12図 遺構内出土遺物 S K 03・S K 04(1)	28	第28図 本城城下絵図.....	54
第13図 遺構内出土遺物 S K 04(2)	29	第29図 白描本城城下絵図.....	54
第14図 遺構内出土遺物 S K 04(3)・ S K 05(1)	30	第30図 出羽之国油利之郡本城図.....	55
第15図 遺構内出土遺物 S K 05(2)・ S K 08(1)	31	第31図 貞享四年本荘絵図.....	55
第16図 遺構内出土遺物 S K 08(2)	32	第32図 調査範囲模式図.....	56
第17図 遺構内出土遺物 S K 08(3)	33	第33図 本荘城下絵図.....	56
		第34図 奉還当時の本荘藩家中地割図	56

表 目 次

第1表 代官小路遺跡と周辺遺跡	第5表 掲載出土遺物一覧表（2）	45
一覧表（1）	第6表 掲載出土遺物一覧表（3）	46
第2表 代官小路遺跡と周辺遺跡	第7表 分析試料及び分析項目一覧	47
一覧表（2）	第8表 花粉分析結果	48
第3表 基準杭と各座標値	第9表 種実同定結果	50
第4表 掲載出土遺物一覧表（1）	第10表 樹種同定結果	53

図 版 目 次

図版1 遺跡遠景（東から）	図版5 甌
同上（北から）	擂鉢
図版2 A区調査前風景（西から）	図版6 皿 見込み蛇の目釉剥ぎ
A区近景（西から）	皿 胎土目
A区基本土層中央部（北から）	皿 蛇の目凹形高台
S K 01 断面（北から）	碗・皿 銘款
遺物出土状況（北西から）	皿 コンニャク印判（五弁花文）
S K 03 断面（北から）	図版7 七輪
S K 04 断面（東から）	瓦
S K 05 確認状況（南から）	図版8 砚
図版3 S K 04・05 完掘（西から）	図版9 下駄
B区調査前風景（西から）	下駄の歯
B区近景（西から）	図版10 箸
B区基本土層中央部（北から）	柱
S K 06 遺物出土状況（西から）	紡錘車
S K 06 完掘（北から）	杭
S X 07 断面（北から）	図版11 板材
B区盛土状況（南から）	図版12 金属製品
図版4 C区調査前風景（東から）	煙管
C区近景（北東から）	ガラス製瓶
C区基本土層東端部（南から）	図版13 花粉化石・出土骨
C区盛土状況（南から）	図版14 種実遺体
S K 08 断面（北から）	図版15 樹種同定（1）
S K 08 完掘（北から）	図版16 樹種同定（2）
S K 09 完掘（北から）	
S D 10 完掘（西から）	

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

由利本荘市は、都市計画法により1934（昭和9）年に都市計画区域として指定された（当時は本荘町）。停車場栄町線は由利本荘市の都市計画道路のひとつで、JR羽後本荘駅と中心市街地とを直結し、第二次緊急輸送道路に指定されている防災上も重要な道路である。

本線は、周辺に公共施設があり、路線バスの運行本数も多い。しかし、現状では道幅は狭く、さらには冬期間には路肩に雪がたまる等の問題があり、車同士のすれ違いや歩行に支障を来たしている状況である。また、前後の区間は拡幅済みとなっており、未改良の当該区間が円滑な交通の妨げとなっている。

地方街路交付金事業（停車場栄町線：裏尾崎町）は、現道の拡張により、円滑な交通と快適な歩行空間の確保を図ることを目的として実施する事業である。

事業主体者である秋田県由利地域振興局（以下、由利地域振興局）は、平成27年10月15日に、秋田県教育委員会（以下、県教委）に対し、埋蔵文化財分布状況について調査を依頼した（由建-1344）。

県教委は、平成28年3月17日、平成30年10月19日に当該地域の試掘調査を行い、新たな遺跡1か所を発見、部分的に本発掘調査が必要であると判断し、平成28年3月30日（教生-1629）及び平成31年3月4日（教生-407）に由利地域振興局に報告した。協議を経て、秋田県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過

発掘調査は220m²の範囲を対象に、調査員2名、作業員5名の体制で実施した。期間は令和2年7月6日（月）から7月17日（金）までである。以下に、調査の経過を1週ずつ記述する。

第1週 7月6日（月）～7月10日（金）

近隣住民の自宅を訪問し、調査の説明を行った後に調査を開始し、調査範囲A区を重機による表土除去の後、精査した。A区は、中心部が現在の建物の基礎やガス管、上下水道管によって搅乱されていた。東側でSK01を検出した。西側でSK04・05を検出した。SK04からは近世の陶磁器片・木片が出土し、SK05からはこぶし大の礫が多量に出土した。10日に重機による調査範囲B区の表土除去を開始した。6日、由利本荘市郷土資料館小松正夫氏来跡。

第2週 7月13日（月）～7月17日（金）

調査範囲B・C区の表土除去及び精査。B区は、東西端が現代の建物撤去の際に搅乱され、砂で埋め戻されていることを確認した。調査可能な中央部で、SK06、SX07を検出。SK06からは近代の醤油瓶が出土した。C区は、中央部が上下水道埋設により搅乱されていた。調査可能な東側で、SK08・09、西側で、SD10を検出。SK08・09からは、近世の陶磁器片の他、煙管や漆器等多種多様な遺物が出土した。遺構検出面は、江戸時代（近世）の盛土整地地業の上面であり、盛土の下から古代

の遺構・遺物が出土する可能性があることから、15日からB区で1か所、C区で2か所トレンチ調査を実施。近世の盛土整地地業を確認した。古代の遺構・遺物は確認されなかった。14日、由利本荘市教育委員会長谷川潤一氏来跡。17日、由利地域振興局加藤忍副主幹（兼）班長、伊藤裕輝技師、由利本荘市教育委員会三原裕姫子文化財班長、佐々木健二主査、文化財保護室伊豆俊祐文化財主任が現地引き渡しのため来跡。

第3節 整理作業の経過

整理作業は、令和2年7月の発掘調査終了時から令和4年3月まで秋田県埋蔵文化財センター中央調査班で実施した。作業経過は以下の通りである。

遺物については、令和2年7月に出土遺物の洗浄を行い、同8月に注記と接合を行った。同9月からは保存処理委託前の木製品及び石製品、金属製品の実測を行った。同12月から令和3年6月にかけて陶磁器を、統いて遺構内・遺構外出土のものについて実測を行った。遺物の実測と並行して、令和2年2月から遺物のデジタルトレースを開始し、8月まで行った。

図面については、令和2年7月に写真及び図面の整理、同8月から9月まで第2原図作成とデジタルトレースを行い、トレース終了図の編集については、令和3年8月から11月の期間に実施した。

原稿、表、地図等の作成については、担当者が継続的に行った。報告書の版組作業は令和3年度に実施した。

第2章 遺跡の位置と環境

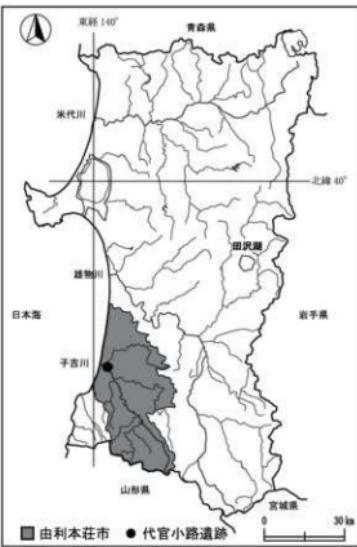
第1節 地理的環境

代官小路遺跡は、秋田県由利本荘市裏尾崎町に所在する（第1図）。遺跡の所在する由利本荘市は、平成17年に本荘市と由利郡のうち岩城町・大内町・島海町・西目町・東由利町・矢島町・由利町の7町が合併して誕生した市である。秋田県の南西部に位置し、日本海に面している。市内を流れる子吉川は、島海山をその源として、旧島海町・矢島町を経て、旧本荘市で石沢川・芋川と合流し日本海へそそぐ、県下第三の規模を誇る流路延長約61kmの川である。日本の河川の中でも、傾斜及び流れが急であり、上流部ではその特性を生かし、落差から生じるエネルギーを水力発電として利用している。また、古くから本荘平野の農業用水として水田に利用され、良質の米を生産してきた。そして、江戸時代から明治時代においては、各河岸場と西廻り海運の寄港地であった古雪港とを結ぶ舟運の要であった。ここでは、移出品として米や木材を、移入品として塩や北海道産の魚といった食料品や、木綿類、古着等の衣料品を運んでいたとする記録が残されている。また、下流部に広がる本荘平野は、古くから県下有数の穀倉地帯であるとともに、現在の由利本荘市の交通・経済・文化の中心地となっている。

遺跡は、北緯39度23分17秒、東経140度2分51秒、子吉川の左岸、本荘平野に立地し、標高は約6mである。また、本荘城から北へ約150m地点、県道165号線に面した裏尾崎町の宅地に所在する。

遺跡周辺の地形は、「土地分類基本調査 本荘」によると、遺跡が立地する本荘平野すなわち子吉川低地（Ⅲa）は、子吉川によって貫流形成された沖積低地である。その南東には石沢川低地（Ⅲb）、北には芋川低地（Ⅲc）が広がり、これらを取り囲むように北山丘陵地（Ⅱb）、中央丘陵地（Ⅱc）、子吉丘陵地（Ⅱd）、葛作丘陵地（Ⅱe）、石橋丘陵地（Ⅱf）が分布する（第2・3図）。

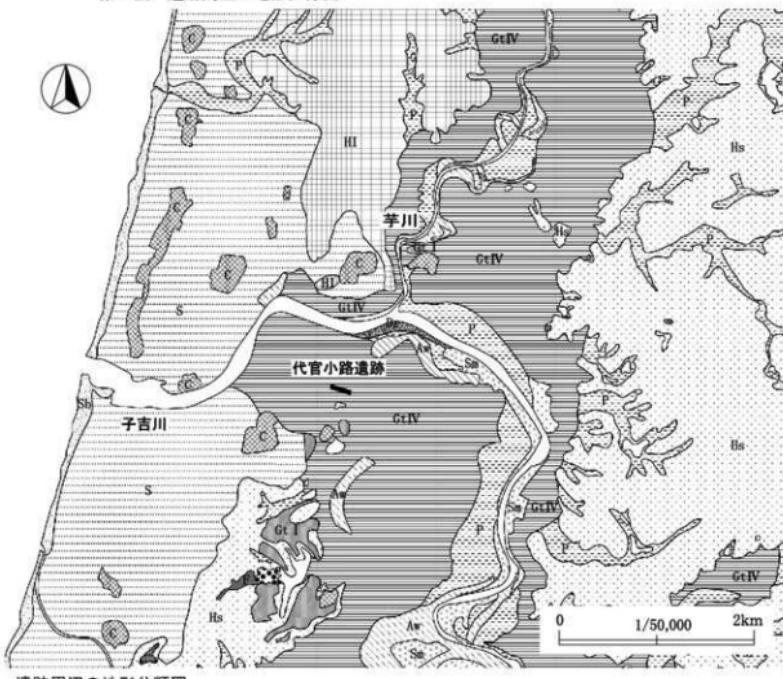
遺跡周辺の地質は、下位から新第三系の山内層・大槻層・鹿ノ爪層・畠村層・須郷田層・権現山層・女川層・薬師山玄武岩・二タ又流紋岩・船川層・新山安山層・鮮新世の天徳寺層・福山安山岩・長者屋布石英安山岩・鶴岡層・更新世の西目層・段丘堆積物・完新世の沖積層から構成されている。



第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡周辺の地形区分図



遺跡周辺の地形分類図



第3図 遺跡周辺の地形分類図

第2節 歴史的環境

由利本荘市では、旧石器時代から近代にかけての遺跡が約480か所確認されている。ここでは、代表小路遺跡が所在する本荘地域を中心に、その歴史と周辺遺跡を概観する（第4図、第1・2表）。

1 旧石器時代から古墳時代の遺跡

旧石器時代の遺跡は、当遺跡周辺からは発見されていない。しかし、由利本荘市徳沢では、2020（令和2）年に行われたオノ神遺跡の発掘調査によって、子吉川水系で初めて旧石器時代のナイフ形石器・石刃・剥片・石核・原石が出土した。市では他にも旧島海町の国見遺跡、旧西目町の新林遺跡等が確認されているが、いずれも発掘調査には至っておらず、わずかにナイフ形石器・搔器・彫刻器を採取したのみである。

縄文時代の遺跡は、菖蒲崎貝塚（15）、土谷白山遺跡（28）、上谷地遺跡（29）、船岡台遺跡（55）等がある。早期末の菖蒲崎貝塚は、日本海側にある貝塚の中でも最大級のものとされ、子吉川とその支流芋川が合流するところに位置する。海岸汀線と同じ高さにあり、市で最も低い所にある遺跡の一つである。発掘調査の結果、この貝塚を残した縄文人が貝類を採取する最盛期は、春から夏にかけてであることが判明した。さらに貝塚からは魚類・鳥類・獸類も確認されている。後期の上谷地遺跡からは、トチのアカ抜きのための施設であると推測される水さらし場遺構が発見された。由利地域は、前期・中期は大木式土器文化圏の中に属しているが、円筒土器文化圏や北陸地方の土器等も出土しており、北東北や北陸地方との交流があったことがうかがえる。

弥生時代・古墳時代の遺跡は、当遺跡周辺からは発見されていない。県内を見渡してみても、当該期の遺跡数は少ない。しかし、旧西目町井岡遺跡では、蠟石製の子持勾玉が発見され、1956（昭和31）年に県の有形文化財に指定されている。また、同じく旧西目町の宮崎遺跡では、北大式土器が出土しており、日本海を利用したヒト・モノの動きがあったことが推測される。

2 古代の遺跡

708（和銅元）年に、中央政府は庄内地方に出羽柵を構築し、現在の秋田県・山形県にあたる地域に出羽国を置いた。その後、733（天平5）年に出羽柵を秋田高清水岡に遷置し、天平宝字年間に秋田城として整備した。秋田城は地方官衙として、エミシに対して養給を催す場及び交易の場としての役割を担っていたと推測される。同じ頃、庄内地方の国府と秋田城との中間地点である当市域には由理柵があったと考えられている。『続日本記』卷三六によると、780（宝龟11）年に宝龟の乱が勃発した際には、中央政府から出羽国に対し、秋田城と国府との連絡に重要な役割を果たしている由理柵について、防衛を強化するよう命令があったという記述がある。由理柵には地方官衙として郡衙に準じた役割があったと考えられているが、所在地や構築された時期等、その実態は現段階では不明である。

当該期の遺跡は、樋ノ口遺跡（7）、横山遺跡（8）、大覚遺跡（18）、岩渕藏遺跡（30）、葛法窯跡（82）、湯水沢遺跡（84）等があり、遺跡の数が増加する。葛法窯跡は、9世紀前半の須恵器窯跡で、湯水沢遺跡・樋ノ口遺跡は、製鉄及び炭の生産を行っていた生産遺跡である。特に湯水沢遺跡は、大規模な製鉄炉や排滓場、鍛冶炉等が検出されている。平安時代前半の横山遺跡からは、竪穴住居跡・溝跡とともに水田跡が発見され、遺物として須恵器・土師器・陶器・ウリ科及びマメ科の種子

等が出土した。水田跡はその規模や形状から人力で掘起され、耕されていたものと考えられる。2003（平成15）年には県史跡に指定された。大覚遺跡からは青銅製の銅印が出土した。岩渕遺跡は古代から近代までの遺構・遺物が発見された遺跡である。9～10世紀の土器が多い出土し、由利本荘市で初めてのロクロ土器焼成遺構が検出された生産遺跡である。この時期になると遺跡数の増加とともに、人々の活動が活発になる様子がうかがえる。

3 中世の遺跡

『吾妻鏡』に、奥州藤原氏の藤原泰衡郎従で、在地領主と推測される由利八郎が登場する。1189（文治5）年の奥州合戦の後、御家人として由利郡地頭職を与えられたが、1190（文治6）年の兼任の乱で戦死する。その後、子の由利維久に受け継がれたが、1213（建保元）年の和田合戦の際に所領を没収された。1213（建暦3）年、由利氏に代わって信濃国の御家人小笠原遠光の娘である大武局が新しく由利郡地頭になり、これを機に小笠原一族が由利に進出した。小笠原氏は、由利郡を直接支配していたわけではなく、在地領主であった由利氏をとりたてて代官として利用し、現地の経営を進めさせていたと考えられている（入間田2008）。大武局の後は、甥である大井朝光が跡を継いだ。その後は、1247（宝治元）年の宝治合戦、1285（弘安8）年の霜月騒動を経て、由利地域は北条得宗領として鎌倉幕府の終焉を迎えた。戦国期になると、「由利衆」または「由利十二頭」と称された国人達（国衆）が登場する。矢島・仁賀保・赤宇曾（赤尾津）・湯保・打越（内越）・子吉・下村・玉米（玉前）・鮎川・石沢・滝沢・脇沢・岩谷（岩屋）・羽根川・芹田等が名を連ねていたとされ、安東氏、小野寺氏、大宝寺氏、最上氏等の影響を受けながら、由利衆内部で抗争を繰り返していた。1560（天正18）年に豊臣秀吉による奥羽仕置・太閤検地を迎えたが、由利衆の場合、知行安堵によって割り当てられた各氏の所領高は非常に小さく、豊臣政権に対して単独で軍役を遂行することは困難であった。そのため、仁賀保・滝沢・打越・赤尾津・岩屋を由利五人衆として定め、その下に他の由利衆達を配置し、把握させるという再編成が行われた。こうして豊臣政権のうちに組み込まれたことによって、由利十二頭とその支配は崩壊した。

当該期の遺跡は、大坪遺跡（2）、大浦遺跡（9）、堤沢山遺跡（19）、土花遺跡（59）等がある。大浦遺跡は集落跡で、7棟の掘立柱建物跡のほか、道路跡が検出された。堤沢山遺跡は鋳造・製鉄・生産を行っていた遺跡で、鍛冶炉・製鉄炉等の遺構、梵鐘の鋳型、風鐸等の仏具の鋳型や、多量の鉄滓が出土した。梵鐘・仏具の願主は在地領主の由利氏と推測でき、大規模生産施設を支えるだけの大きな経済力・政治力・経営能力を持っていたと考えられる（鈴木2013）。大坪遺跡からも鍛冶炉が見つかっており、大坪遺跡・堤沢山遺跡が所在する地域一帯は、それぞれ金属製品の一大生産地であったと考えられる。中世城館は、岩倉館跡（17）、館前館跡（35）、株切館跡（36）、埋田小館跡（44）、子吉館跡（45）、万願寺館跡（53）、鳴瀬館跡（62）、岩館跡（66）、曲沢館跡（67）、山崎館跡（75）、蒲田館跡（76）、豊後館跡（91）、前ヶ沢跡（92）、湯保館跡（93）がある。岩倉館跡、子吉館跡、山崎館跡はそれぞれ由利十二頭の館である。打越氏の岩倉館跡は、内越館跡とも呼ばれ、丘陵地の急峻な尾根上及びその周辺の高台に造られている。自然地形を巧みに活かした防御を主体とした典型的な中世城館である。

4 近世の遺跡

1600（慶長5）年の関ヶ原の戦いの後、秋田・石沢・赤尾津・六郷・仁賀保の各氏は、関ヶ原の戦

いに不参加であったため、徳川家康によって転封を命じられた。そのうち仁賀保・打越の両氏は徳川氏の家臣、滝沢・岩屋の両氏は最上氏の家臣となった。赤尾津氏は改易となり、中世以来の歴史に幕を降ろした。

由利衆の解体後、由利一円は最上義光の所領となった。その家臣として由利地方に知行地を宛てがわれたのは、楯岡満茂・滝沢正道・岩屋朝繁の三氏であった。その一人、楯岡満茂は、1604（慶長9）年頃、由利入部後に自領の居城にちなみ、その姓を赤尾津と改めている。1612（慶長17）年、最上氏は、領内總檢地を行い、この検地の結果作成された検地帳によって由利地方を網羅的に把握し、赤尾津（楯岡）・滝沢・岩谷（岩屋）の三氏に改めて知行地を宛がった。また、最上氏は、滝沢・岩屋両氏にその子息を山形へ証人（人質）の差し出しを命じ、岩屋氏を古雪御城普請へ勤員した。1613（慶長18）年、最上氏は、本城城の築城と城下の建設のため、由利郡内の各氏に普請役を賦課した。この普請役は前年の検地の結果を基にした領知高に準拠していたと考えられている。城普請と町割り終了後、赤尾津（楯岡）満茂は本城城に入り、再び姓を本城と改めている。1614（慶長19）年1月に最上義光が山形城において死去し、次男家親が跡目を継いだ。家親急死の後、一栗兵部大輔による庄内鶴岡城下における反乱を経て、義俊の代となった1622（元和8）年、最上騒動が勃発した。結果として義俊は騒動を收拾できなかった責任を問われ、同年8月に幕府によって改易を言い渡された。羽州山形57万石の没収と、近江・三河において1万石を拝領するとともに、藩主から幕府交代寄合という身分になった。これにより最上氏は代々大名として統治してきた出羽国を去ることとなった。最上氏の改易に伴い、その有力家臣であるとともに、独立した支配体制を持っていたとされる本城氏も由利を退去了。その後の本城氏は、7名の旧最上氏の家臣を連れ、前橋藩酒井家にて酒井家家臣として近世を生きることとなった。

1622（元和8）年、幕府の命を受けた近隣の大名達により、山形城の取公及び各支城の受け取りが実施された。接收作業終了とともに本城城及び滝沢城の破却が下命され、同年10月9日から16日にかけて秋田佐竹氏の家臣團によって実施された。本城城が、本城氏の居城としてその役割を果たしたのは、1613（慶長18）年から数えてわずか約10年であった。

1622（元和8）年10月1日に改易され、宇都宮から由利地域へ減転封されていた本多正純は、1623（元和9）年に佐竹氏預かりとなり由利を去った。同年、常陸國府中1万石の六郷政乗は、幕府の命で1万石あまり加増され、本城氏が築いた本荘城に入り、ここに石高2万石の本荘藩が成立した。しかし、本荘城は、前年に滝沢城とともに破却されていたため、政乗は早急に本荘城を居城として機能させるとともに、城下を再建する必要があった。結果として政乗は、城郭の規模及び侍町・足輕町の縮小など、支配体制に関わる部分については、自らの領知高に見合うように改造を加えたが、町方の規模や構造などは基本的には本城氏時代を踏襲する形をとった。その他、政乗が行った政策としては、藩主となった翌年に行った検地がある。村の範囲を定め、村ごとの耕地と生産量を把握するためであった。また、由利郡内の街道や湊の整備を行ったとされる。

江戸時代半ばになると、藩政改革を見越して人材を育成するため、七代藩主六郷政親によって終身館が開かれている。

1853（嘉永6）年にアメリカからペリー艦隊が開国を要求して浦賀に来航した。そして、1867（慶應3）年10月、將軍徳川慶喜の大政奉還によって江戸幕府の長い歴史に終止符が打たれ、12月に新政

府は王政復古の大号令を発するとともに、慶喜の辞官納地を決定した。そして翌年には鳥羽・伏見の戦いが勃発した。同年5月、東北及び越後の諸藩は、「奥羽越列藩同盟」を結び、新政府軍に対抗しようとしたが、奥羽鎮撫總督府が秋田に入ると秋田藩はこれを離脱し、由利諸藩もこれに続くことになった。7月から9月にかけて戦闘状態に陥った由利諸藩は、庄内軍に追い詰められた。本荘藩主六郷政鑑は、籠城しての徹底抗戦を主張したが、總督府參謀大山格之助に促され、やむなく城に火を放ち秋田城へ向かった。その後、進攻してきた庄内軍によって城下の大部分と亀田藩領の石脇村が消失する等の甚大な被害を受けて、由利地方の激動の時代は終わった。

近世の遺跡は、岩淵藏遺跡（30）、本荘城跡（33）、滝沢城跡（102）等がある。岩淵藏遺跡は、掘立柱建物跡や溝跡・土坑等の遺構と、陶磁器・木製品といった遺物が出土した蔵屋敷跡である。滝沢城は、最上氏家臣の滝沢氏の居城で、1603（慶長8）年の築城から1622（元和8）年の破却までの時期にあたる掘立柱建物跡・堀・井戸・土坑等の遺構が検出された。遺物は17世紀初頭の陶磁器の他、16世紀前葉から末葉の遺物も出土している。

註 城下は本城氏時代には本城と表記されているが、六郷氏入部後、寛永末に制作されたといわれる『幕府撰慶長日本図』には、現在の由利本荘市にあたる箇所に「本庄」という地名が記されている。

参考文献（番号は第1・2表の参考文献番号に対応する）

- 1 秋田県『秋田県史 考古編』 1977（昭和52）年
- 2 秋田県『土地分類基本調査 本荘』 1980（昭和55）年
- 3 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981（昭和56）年
- 4 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（由利地区版）』 2001（平成13）年
- 5 秋田県教育委員会『大浦遺跡』 秋田県文化財調査報告書第336集 2002（平成14）年
- 6 秋田県教育委員会『横山遺跡』 秋田県文化財調査報告書第363集 2003（平成15）年
- 7 秋田県教育委員会『大坪遺跡』 秋田県文化財調査報告書第375集 2004（平成16）年
- 8 秋田県教育委員会『上谷地遺跡・新谷地遺跡』 秋田県文化財調査報告書第395集 2005（平成17）年
- 9 秋田県教育委員会『岩倉館跡』 秋田県文化財調査報告書第423集 2007（平成19）年
- 10 秋田県教育委員会『堤沢山遺跡』 秋田県文化財調査報告書第430集 2008（平成20）年
- 11 秋田県教育委員会『湯水沢遺跡』 秋田県文化財調査報告書第431集 2008（平成20）年
- 12 秋田県教育委員会『堤沢山遺跡（第2次）』 秋田県文化財調査報告書第514集 2010（平成31）年
- 13 本荘市史編纂室『本荘市史研究』 第2号 1982（昭和57）年
- 14 本荘市『本荘市史 史料編Ⅰ上』 1984（昭和59）年
- 15 本荘市『本荘市史 史料編Ⅲ』 1986（昭和61）年
- 16 本荘市『本荘市史 通史編Ⅰ』 1987（昭和62）年
- 17 本荘市『本荘市史 通史編Ⅱ』 1994（平成6）年
- 18 本荘市『本荘の歴史 普及版』 2003（平成15）年
- 19 本荘市教育委員会『葛法窯跡分布調査報告』 本荘市文化財調査報告書第2集 1978（昭和53）年
- 20 本荘市教育委員会『上谷地遺跡・新谷地遺跡』 本荘市文化財調査報告書第19集 2003（平成15）年
- 21 由利本荘市教育委員会『堤沢山Ⅱ遺跡』 由利本荘市文化財調査報告書第3集 2006（平成18）年
- 22 由利本荘市教育委員会『上谷地遺跡（第2次調査）』 由利本荘市文化財調査報告書第5集 2006（平成18）年

- 23 由利本荘市教育委員会 「菅原崎貝塚」 由利本荘市文化財調査報告書第6集 2007（平成19）年
- 24 由利本荘市教育委員会 「本荘城跡一本丸の発掘調査一」 由利本荘市文化財調査報告書第8集 2008（平成20）年
- 25 由利本荘市教育委員会 「岩淵城跡」 由利本荘市文化財調査報告書第22集 2015（平成27）年
- 26 由利本荘市教育委員会 「滝沢城跡」 由利本荘市文化財調査報告書第26集 2018（平成30）年
- 27 由利町 「由利町史 改訂版」 1985（昭和60）年
- 28 由利町教育委員会 「滝沢城跡」 由利町文化財調査報告書第23集 2004（平成16）年
由利櫛・駅家研究会 「井岡遺跡第5次発掘調査報告書V 井岡遺跡発掘調査の総括」 2016（平成28）年
- 入間田宣夫 「平泉藤原氏と日本海城の武士団」『鶴舞』第95号 2008（平成20）年 1-25頁
- 鈴木 登 「山利地域の古代末・中世初頭の様相」『古代山埋横の研究』 2013（平成25）年 83-113頁
- 長谷川潤一 「本荘山利地域における古代・中世初頭の遺跡と遺物」『古代山埋横の研究』 2013（平成25）年 199-230頁



第4図 代官小路遺跡と周辺遺跡位置図

第1表 代官小路遺跡と周辺遺跡一覧表（1）

番号	道路地図番号	道路名	所在地	種別	遺構・出土遺物等	時期	参考文献
1	210-5-104	代官小路	由利本荘市裏尾崎町並 武家屋敷跡	【近世】土瓦、瓦飾、陶器類、木製品、土製品、金銅製品、ガラス製品、植物	近世	-	
2	210-5-102	大坪	福谷字大坪330	集落跡 生産遺跡	【國文時代】石器【古代】堅穴造構、掘立柱建物跡、井戸跡、土壙、土壁、土間、土間窓、鐵器類、所持陶器【中世】鍛冶炉、清跡、陶器、土製品、石製品、木製品、鐵製品、鐵闘遺物、铁貨	國文、古代・中世	7
3	210-5-86	李種坂 I	福山字李種坂	遺物包含地	【古代】土器類、須恵器	古代	-
4	210-5-88	李種坂 II	福山字李種坂	遺物包含地	【古代】須恵器	古代	-
5	210-5-91	李種坂 III	福山字李種坂	生産遺跡	【古代】堅穴造跡、柱立柱建物跡、柱穴様ピット、石製品、鐵闘遺物	古代	-
6	210-5-63	新ウルイノ	福谷字新ウルイノ	遺物包含地	【古代】土器類	古代	4
7	210-5-85	橋ノ口	福山字橋ノ口36	生産跡	【國文時代】堅穴造構、掘立柱建物跡、水田跡、水路跡、土師器、須恵器、堅穴造、陶器類、鐵製品、鐵闘遺物、铁貨	國文、古代・中世	-
8	210-5-66 210-5-(3)	横山	福山字横山07-1	集落跡 生産遺跡	【國文時代】石器【古代】堅穴住居跡、掘立柱建物跡、水田跡、水路跡、土師器、須恵器、堅穴造構、鐵製品、鐵闘遺物、鐵製品、鐵闘、鐵貨、土器、土瓶、土壙、土間、土間窓、鐵器類、鐵製品、鐵闘	國文、古代・中世	4・6
9	210-5-13	大浦	大浦字八走145	集落跡	【國文時代】石器【古代】堅穴住居跡、掘立柱建物跡、水田跡、水路跡、土師器、須恵器、堅穴造構、堅穴造、陶器類、鐵製品、鐵闘、鐵貨、土器、土瓶、土壙、土間、土間窓、鐵器類、鐵製品、鐵闘	國文、古代・中世	4・5
10	210-5-21	兵老沼	石崎字兵老沼	遺物包含地	【國文時代】石器【古代】土器類、須恵器【中世】堅穴造構、掘立柱建物跡、井戸跡、鍛冶炉、土坑、道路・通路構等、陶器類、土製品、石製品、木製品、鐵製品、鐵闘遺物、鐵闘、鐵貨、土器、土瓶	國文	4
11	210-5-14	川口塚	川口字愛宕山	船跡	【古代】紙器【中世】空瓶	古代、中世	3・4
12	210-5-20	尾原野	石崎字尾原野10-1	遺物包含地	【國文時代】石器【古代】土器類、須恵器、堅穴造構、鐵製品、鐵闘遺物、鐵製品、鐵闘	國文	4
13	210-5-(1)	森酒酒店	石崎字石崎53	仓库(有形文化財)(建造物)	西造、東造、鐵製品、漆器、文庫、米袋、壠築、事務所、中藏、門、住宅	近代	-
14	210-5-63	石脇中町	石脇字石脇	遺物包含地	【國文時代】純土器	國文	4
15	210-5-16	森崎貝塚	相口字下森崎塚9	貝塚	【國文時代】砂土、砂砾、水塘遺構、鐵文土器、石器、木製品、骨製品、自然遺構【古代】掘立柱建物跡、陶器、井戸跡、土師器、須恵器、土器類、土瓶	國文、古代	4・14
16	210-5-17	子吉川底	相口字下森崎塚付近川底	川底	【國文時代】純土器	國文	4・13
17	210-5-15	岩倉館	福山字岩倉1	船跡	【國文時代】石器【古代】土器類、須恵器【中世】堅穴造構、掘立柱建物跡、井戸跡、豪室、土壙、土間、土壁、土坂跡、陶器類、土製品、石製品、木製品、鐵製品、鐵闘遺物、鐵闘、鐵貨、土器、土瓶	國文、古代・中世	3・4・9 14
18	210-5-67	大覚	相口字大覚	遺物包含地	【古代】土器類、須恵器	古代	4
19	210-5-101	堤沢山	相口字大学堤沢山5	生産跡	【中世】堅穴造構物跡、井戸跡、カマド様造構、鐵製遺物、鐵製品、鐵製品、鐵闘、鐵闘遺物	中世	10・12
20	210-5-93	堤沢山 II	相口字大学堤沢山7	集落跡	【國文時代】純土器、石器【古代～中世】豪室	國文、古代～中世	21
21	210-5-69	新谷地	土谷字新谷地90	生産跡	【國文時代】石器【古代】清跡、土器類、須恵器【中世】堅穴造構物跡、井戸跡、土壙、活堀等場、須恵器系中世陶器、陶器、土製品、木製品	國文、古代・中世	4・8
22	210-5-70	岩瀬堤	土谷字岩瀬	遺物包含地	【古代】土器類	古代	4
23	210-5-105	新谷地西	土谷字新谷地	散布地	【古代】土器類、須恵器、陶器	古代	-
24	210-5-18	七谷	土谷字下ノ沢	遺物包含地	【中世・近世】堅穴少頭跡、日向系陶器、唐津燒、羽口、铁薄	中世・近世	5
25	210-5-71	上谷田ノ沢	土谷字下ノ沢	遺物包含地	【中世】陶器、鐵薄	中世	4
26	210-5-72	上谷堤下	土谷字下ノ沢	遺物包含地	-	-	4
27	210-5-73	上谷堤上	土谷字下ノ沢	遺物包含地	-	-	4
28	210-5-74	上谷白山	土谷字下ノ澤	遺物包含地	【國文時代】純土器	國文	4
29	210-5-68	上谷地	土谷字上谷地2	食料生産遺跡 集落跡	【國文時代】水塘遺構、活堀跡、鐵文土器、石器、木製品【古代】堅穴造構、掘立柱建物跡、井戸跡、土壙、活堀等、土師器、須恵器、土製品、石製品、木製品、鐵製品、鐵闘【中世】堅穴状造構、溝跡、土坑、陶器類、木製品、鐵製品【近世】陶器	國文、古代・中世	4・8
30	210-5-97	岩瀬藏	美食町13	散布地	【古代】柱穴、土壙器、須恵器、陶器【近世】陶器	古代・近世	25
31	210-5-22	東町	東町59-2	遺物包含地	【國文時代】純土器	國文	4・14
32	210-5-(2)	永泉寺山門	蔚堂字44	點跡(有形文化財)(建造物)	【近世】山門	近世	-
33	210-5-64	本荘城	由利本荘市尾崎	城跡	【國文時代】純土器、石器【古代】土器類、須恵器【中世】堅穴造構物跡、柱列、堅穴少頭跡、井戸跡、土壙、活堀等、土師器、須恵器、土製品、石製品、木製品、鐵製品、鐵闘【中世】堅穴造構、圓窓、土壙、土坑、陶器類、木製品、鐵製品、鐵闘	國文、古代・中世	4・24
34	210-5-19	田尻	石崎字田尻	遺物包含地	【國文時代】純土器	國文	4
35	210-5-32	猪苗彌	福島字猪苗彌	船跡	【古代～中世】鐵器、須恵器四耳壺	古代～中世	3・4・14
36	210-5-30	柳切塙	福島字柳切塙	船跡	-	中世	3・4
37	210-5-52	小友金山	金山	遺物包含地	【國文時代】純土器、石器	國文	4
38	210-5-51	熊野神社	大字字南御	遺物包含地	【國文時代】純土器	國文	4
39	210-5-35	三森山	三森字定ノ沢	遺物包含地	【國文時代】純土器	國文	4
40	210-5-92	根本田	二十六字根本田	散布地	【古代】土器類、須恵器	古代	-
41	210-5-95	垂面安谷地	垂面字安谷地124-5	散布地	【古代】土器類	古代	-
42	210-5-81	垂面堂上野	垂面字上野8	散布地	【古代】堅穴造構、掘立柱建物跡、井戸跡、土師器、須恵器、土壙、活堀等、土坑、活堀等、土間、土間窓、鐵製品、鐵製品、鐵闘【中世】井戸跡、近世	古代・中世・近世	4
43	210-5-24	垂面堂	垂面字堂ノ下	遺物包含地	【國文時代】純土器	國文	4
44	210-5-25	理田小畠	理田字小畠	船跡	-	中世	3・4
45	210-5-23	子吉原	垂面原字林地内	船跡	【中世】井戸跡、土壙、空堀、馬場跡	中世	3・4・14

※登録有形文化財含む

第2表 代官小路遺跡と周辺遺跡一覧表 (2)

番号	遺跡地図番号	遺跡名	所在地	種別	遺構・出土遺物等	時期	参考文献
45	210-41-32	北沢	西日町海土酒字北沢	遺物包含地	【本文時代】繩文土器、石棒	縄文	4
47	210-41-22	沢沢	西日町海土酒字沢沢P21	遺物包含地	【本文時代】繩文土器	縄文	4
48	210-5-26	駒角船	藤崎字苦竹沢	船跡	-	-	4
49	210-5-33	駒城船	愛町字扇田	船跡	【中世】鐵製、	中世	3・4・15
50	210-5-100	扇田	愛町字扇田10-17	集落跡	【古代】土師器、鐵製器	古代	-
51	210-5-36	上野船	上野字上野	船跡	-	-	4・14
52	210-5-49	上野小船	上野字上野	船跡	-	-	4・14
53	210-5-34	万願寺船	万願寺字日昇田	船跡	【中世】鐵製、空器	中世	3・4・14
54	210-5-98	宮内	宮内字上ノ野	散布地	【本文時代】繩文土器、石器	縄文	4
55	210-5-27	船岡台	船岡字船岡台	遺物包含地	【本文時代】繩文土器、石器、石製品	縄文	4・14・16
56	210-5-28	花舟	船岡字船岡	船跡	-	-	中世
57	210-5-87	船岡東ノド	船岡字東ノド168	散布地	-	-	古代
58	210-5-96	船岡大沢	船岡字大沢	集落	【古代】土師器	古代	-
59	210-5-75	土丸	万願寺字土丸12-6	集落	【本文時代】繩文土器、石器【古代】道路、土師器、領忠器、陶器、洪門港遺物【古文】水田路、鐵器、鐵質	縄文・古代・近世	-
60	210-40-1	成田台	南畠字下鳴瀬10-1	遺物包含地	【本文時代】繩文土器、石器	縄文	1・4
61	210-5-31	鳴瀬船	鳴瀬字下鳴瀬	遺物包含地	【本文時代】繩文土器	縄文	4・14
62	210-40-2	鳴瀬船	南畠字下鳴瀬71	船跡	【本文時代】繩文土器【古代】土師器【中世】土器、陶器、鐵製品、洪門港遺物、焼器	縄文・古代・中世	3・27
63	210-5-79	鳴瀬	鳴瀬字下鳴瀬	遺物包含地	-	-	4
64	210-40-3	中鳴瀬	南畠字中鳴瀬71-1	遺物包含地	【本文時代】道路、土坑、繩文土器【中世】陶器、鐵製品、洪門港遺物	縄文・中世	4
65	210-40-4	南畠川	町字鳴瀬巣1-1	遺物包含地	【本文時代】土坑、溝状遺構、繩文土器、石器、石製品【古代】柱穴	縄文・古代	1・4
66	210-5-37	岩船	鳥居字岩船	船跡	【中世】鐵製、空器	中世	3・4・14
67	210-5-80	曲尺船	由利本荘市船塚字山張	船跡	【中世】器、空器	中世	3・4
68	210-40-29	千手台	曲尺字千手台9	遺物包含地	【本文時代】石器	縄文	4
69	210-40-30	曲尺島地経塚	曲尺字千手台9	経塚	-	-	近世
70	210-40-31	曲尺大石經塚	曲尺字中谷地	経塚	【近世】絆石	近世	4
71	210-40-32	吉良神社境内経塚	曲尺字山木2	経塚	-	-	近世
72	210-40-34	算+森墓地経塚	算ヶ森字寺跡ヶ54	経塚	-	-	近世
73	210-40-33	中原	中原字中原	遺物包含地	【古代】土師器、須恵器	古代	4
74	210-40-8	黒川舟所跡	黒川63	舟所跡	-	-	近世
75	210-40-5	山崎船	東駒字上山崎10	船跡	【中世】器、土器、空器、鐵製、鐵器、柱穴式、陶器、鐵製品、鐵質	中世	3・4・27
76	210-40-6	瀬戸船	東駒字上山崎前87-3	船跡	【中世】器、擬柱式建物跡、板垣跡、鐵製、土坑、掘跡、溝跡、	中世	3・4・27
77	210-40-74	街府城	町字街府城	寺院跡	陶器残、鐵津	-	-
78	210-40-77	方野村草の島	町字野黒森	塚	-	-	古代
79	210-40-79	寺尾寺経塚	町字街府城126-1	経塚	【近世】土坑、絆石	近世	4
80	210-5-89	真鍋上	鳴瀬字長井上130	生産遺跡	【古代】土師器、須恵器、鐵津	古代	-
81	210-5-29	鳴瀬山船	鳴瀬字山船	船跡	-	-	4・14
82	210-5-30	鳴瀬山船	鳴瀬字山船	船跡	【古代】須恵器、須恵器	古代	4・14・20
83	210-5-99	坂曲	鳴瀬字坂曲	集落跡	【中世】近世柱穴複数	中世・近世	-
84	210-5-90	鳴瀬沢	鳴瀬字鳴瀬沢C35-19	牛糞道跡	【古代】窓穴在牛糞跡、土坑、粘土採掘坑、鐵製品、鐵製品、鐵製品、燒窯、灰堆場、須恵器、鐵製品、鐵製品、燒窯、灰堆場	古代	11
85	210-5-78	子合大堤	船岡字大堤	遺物包含地	【古代】土師器、缺口、跳津	古代	4
86	210-5-81	善石	船岡字善石	遺物包含地	-	-	4
87	210-41-37	中沢	西日町西字中沢	遺物包含地	【本文時代】繩文土器	縄文	4
88	210-41-43	堅田	西日町西字堅田	遺物包含地	【古代】須恵器	古代	4
89	210-41-45	堅田川	西日町西字堅田川	遺物包含地	【本文時代】繩文土器	縄文	4
90	210-41-8	井ノ川	西日町西字井ノ川	遺物包含地	【本文時代】下ノ丁、土坑、土壙、土器、繩文土器、石器【古代】擬柱式建物跡、堅穴住居跡、圓窓跡、須恵器、土師器、土器土器【古文】圓窓跡	縄文・古代・近世	4
91	210-41-17	曾根船	西日町西字曾根P21	船跡	【中世】玉器	中世	3・4
92	210-41-58	前ノ沢	西日町西字前ノ沢	遺物包含地	【古代】土師器、須恵器	古代	3・4
93	210-41-11	高見原	西日町西字古高見5	船跡	【中世】鐵製、空器	中世	3・4
94	210-41-57	船ノ後	西日町西字船ノ後	遺物包含地	【本文時代】繩文土器	縄文	4
95	210-41-20	中沢	西日町西字中沢1-1	遺物包含地	【本文時代】繩文土器	縄文	4
96	210-41-48	中島沢	西日町西字中島沢	遺物包含地	【古代】土師器、須恵器、鐵津	古代	4
97	210-40-9	大沢川	東駒字大沢川	遺物包含地	【本文時代】漏片	縄文	4
98	210-40-10	明治台	森子字明治台233	遺物包含地	【本文時代】石器	縄文	4
99	210-40-35	上森寺	前郷字前郷36-9	今院跡	【近世】石塀	近世	27
100	-	佐々木家住宅	前郷字前郷207	登録有形文化財(建造物)	主屋、養老間、文蔵、小便所	近代	-
101	210-40-36	電鉄寺	前郷字前郷124-1	寺院跡	-	-	27
102	210-40-37	高沢城	前郷字前郷125	船跡	【近世】擬柱式建物跡、櫛列式、鍵孔造機、土坑、陶器、鐵製器、本製品	近代	3・27・26

※登録有形文化財含む

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 発掘調査

遺跡は東西に伸びる街道沿いに位置する。分布調査によって遺構が検出された3か所について、本発掘調査が必要な範囲と判断し、東から順にA区、B区、C区と呼称した。

遺構・遺物の位置を計測・記録するために基準とする杭の打設は、専門業者に委託した。まず東西方向に並んでいる3か所の調査範囲すべてを通る基準線を設定した。この基準線は世界測地系平面直角座標北から西方向に73°傾いている。基準杭は基準線上に設置することとし、各調査範囲の東西境界付近に1つずつ、計6点を設置、調査区名と個別番号を組み合わせた呼称を付した。各座標値は世界測地系第10系を原点として以下の通りである。

第3表 基準杭と各座標値

呼称	X座標	Y座標	標高(m)
A1	-67667.079	-67600.475	5.892
B1	-67633.476	-67710.389	6.111
C1	-67624.983	-67738.170	6.113

呼称	X座標	Y座標	標高(m)
A2	-67658.893	-67627.252	6.009
B2	-67630.845	-67718.996	5.914
C2	-67618.843	-67758.252	5.835

調査範囲は旧歩道と宅地であり、アスファルトでの仮舗装又は砂利敷きで整地されていた。各区の舗装と工事用盛土は重機で撤去、排土は随時搬出した。近世の遺構検出面の精査と遺構掘削は、人力で行った。近世の遺構調査の後、下位に古い時代の遺構がないか確認のため、重機で深掘りを入れた。

遺構は、種別を表すアルファベットの記号と検出順を表す通し番号を組み合わせて「S K01」のように呼称し、検出状況・土層断面・遺物出土状況・完掘状況を写真撮影、人力で実測・図化した。遺物は、遺構内出土の場合は遺構名、遺構外出土の場合は調査区と層位、出土年月日を記録して取り上げた。遺構精査の進捗状況は調査日誌に、遺構の特徴と最終的な所見は遺構調査カードに記述した。

遺跡の立地や周辺地形を記録するため、ドローンによる空中写真撮影を委託によって実施した。

採取した土壤サンプル、種実及び獸骨サンプルについては、理化学的分析もしくは同定を専門機関に委託した。

2 整理作業

遺構図面は、発掘調査で作成した図をスキャンもしくはデータ変換によりデジタルデータ化し、平面図と断面図を組み合わせドローイングソフト（アドビシステムズ社製「Illustrator 2020」）によってトレースを行った。遺構の記述については遺構調査カードを基に行った。

遺物は、洗浄後に白色ポスターカラーで注記を行い、接合、復元し、記載する遺物の選別を行った。遺物の図化については、実測図を作成した他、必要なものは拓本を作成した。実測図はスキャンし、ドローイングソフトによってトレースを行った。拓本は、画像処理ソフトで調整した。

写真は、撮影したRAWデータを現像しフルサイズで非圧縮のTIFFデータを生成して保存用とした。掲載写真はこの中から選定、一部コンパクトデジタルカメラで撮影したデータも使用した。

遺構・遺物の実測図及び写真は、ドローイングソフトによってレイアウトを行った。

本発掘調査に関する資料の収納、保管については、報告書に記載した出土品は、それぞれ個別に揮番号と実測図のコピーとともにポリエチレン袋に収納した。その後、素材別に概ね揮順になるようプラスチック製コンテナボックスに収納した。遺構原図等のマイラーベース、遺物実測図類はA2判のボックスファイルに収納した。デジタルデータ類は光ディスクに記録し、メディア用ファイルに収納した。

遺物及び図面、デジタルデータなどの調査関連資料は、秋田県埋蔵文化財センターに保管する。

第2節 基本層序（第6図、図版2、3、4）

調査範囲境界と坪掘りによって確認した層序は以下の通りである。

I a 層	10YR 4 / 2 灰黄褐色。しまり弱。粘性弱。φ 5 ~ 200mm人頭大礫70%含む。砂利層。 近・現代の盛土。
I b 層	2.5Y 3 / 1 黒褐色。しまり中。粘性中。φ 5 ~ 200mm礫60%含む。上部砂利下部砂質粘土層。舗装の下地として敷かれた地山と拳へ人頭大の礫の層。上位は礫の含有率が高く、下位ほど礫は減少する。近・現代の盛土。
I c 層	2.5Y 3 / 3 暗オリーブ褐色。しまり強。粘性中。3 ~ 50mm礫10%含む。φ 10 ~ 50mm炭化物3%含む。砂質粘土層。近・現代の盛土。
I d 層	5 Y 3 / 2 オリーブ黒色。しまり中。粘性中。小礫へ人頭大礫20%含む。φ 10 ~ 30mm炭化物3%含む。砂質粘土層。近・現代の盛土。
II 上層	2.5YR 4 / 3 オリーブ褐色。しまり強。粘性強。φ 3 ~ 5 mm炭化物3%含む。砂質粘土層。土中の鉄分が酸化した赤い斑が散っている。当時の地表面に近いと考えられる。江戸時代の遺構検出面。江戸時代の盛土。
II 下層	5 Y 7 / 1 灰白色。しまり強。粘性強。II上層より酸化しておらず色が明るい。粘土層。土中の鉄分が酸化した赤い斑が散っている。江戸時代の遺構検出面。江戸時代の盛土。
III a 層	7.5YR 4 / 6 褐色。しまり強。粘性強。スクモ5%含む。赤っぽく、湿度・粘度が高い。腐食した植物遺体を含む。粘土層。江戸時代の盛土。
III b 層	2.5Y 4 / 2 暗灰黄色。しまり強。粘性強。IV層土ブロック2~4cm角5%含む。スクモ3%含む。a層より酸化が進んで黒い。粘土層。江戸時代の盛土。
IV 層	10YR 4 / 2 暗灰黄色。しまり強。粘性強。スクモ3%含む。锖色がまだらに入る。白色が強く、湿度・粘度が高い。腐食した植物遺体を含む。粘土層。江戸時代の盛土。
V 層	2.5Y 3 / 1 黒褐色。しまり強。粘性強。表出直後は灰色だが、見る間に酸化して黒ずんでいく。粘土層。江戸時代以前の自然堆積層。
VI 層	5 Y 7 / 1 灰白色。しまり強。粘性強。V層より白色が強い。粘土層。江戸時代以前の自然堆積層。

なお、V層とVI層はC区東側深掘りにてサンプルを採取し、理化学的分析を行った（第4章参照）。

第3節 検出遺構と出土遺物

1 検出遺構と出土遺物の概要

検出した遺構は9基である。内訳は、江戸時代に属するものが7基、大正～昭和初期が1基、時期不明が1基である。江戸時代の遺構は土坑が6基、溝跡が1条である。大正～昭和初期の遺構であるSK06土坑は、醤油瓶の埋納方法が特徴的であったため本報告書に掲載することとした。

遺物には、近世陶磁器、土器、土製品、石製品、木製品、金属製品、ガラス製品がある。遺物の総量は、整理用コンテナ（内寸54×34×9cm）換算で6箱である。なお、近世陶磁器については、大橋康二による編年（大橋1989）、九州近世陶磁学会の編年（九州近世陶磁学会2000）、堀内秀樹による編年（堀内1997・2000）を参考にした。また、下駄については市田京子の論考（市田2000）、煙管の年代については、古泉弘の編年（古泉2001）を参考にした。

各遺物の詳細については、第4～6表の出土遺物一覧表に記載する。

2 江戸時代の遺構

(1) 土坑

SK01（第8図、図版2）

【位置】 A区東端に位置する。

【検出層位】 Ⅲ層上面で検出した。

【検出状況】 I層除去中、アスファルト舗装面から深さ約0.5mで黒褐色土のプランを検出した。西側一部を検出したのみで、大半は調査区外に広がる。

【重複関係】 なし。

【規模】 残存する長軸は1.84m、短軸不明、深さ0.64mである。

【形態】 平面形は不明で、長軸方向はN-11°-Eである。断面形は、底面が丸みを帯びて、壁は緩やかに立ち上がる。

【堆積土】 2層に分けた。1層は地山土と宅地造成の際に削平された旧表土の黒色土とが混和した人為堆積。2層はしまりのない黒色のシルト腐植土である。

【出土遺物】 なし。

【所見・時期】 西側を木製電柱・植栽痕による擾乱で壊されており、出土遺物もないことから、詳細は不明である。

SK03（第9・12図、図版2・6）

【位置】 A区西端の南側壁際に位置する。

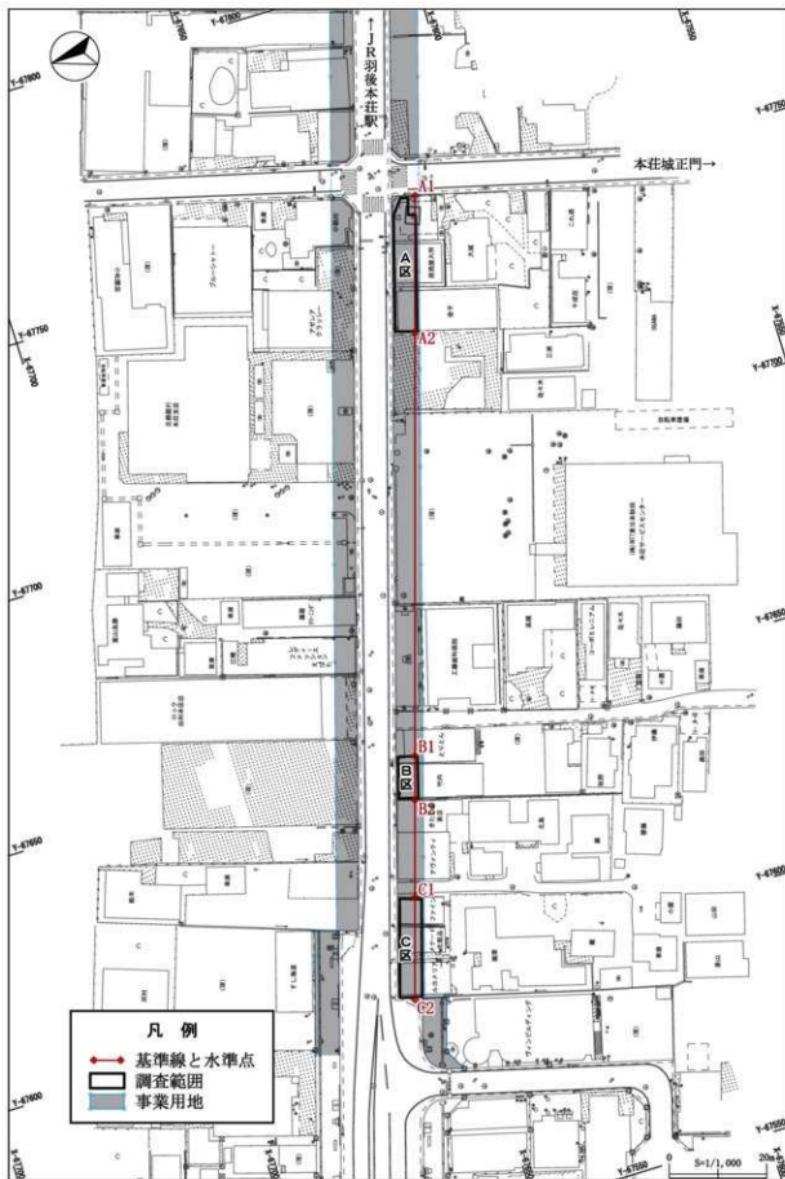
【検出層位】 Ⅱ層上面で検出した。

【検出状況】 I層除去後の精査により、広範囲に及ぶ黒褐色土のプランを確認した。南側は調査区外に広がる。

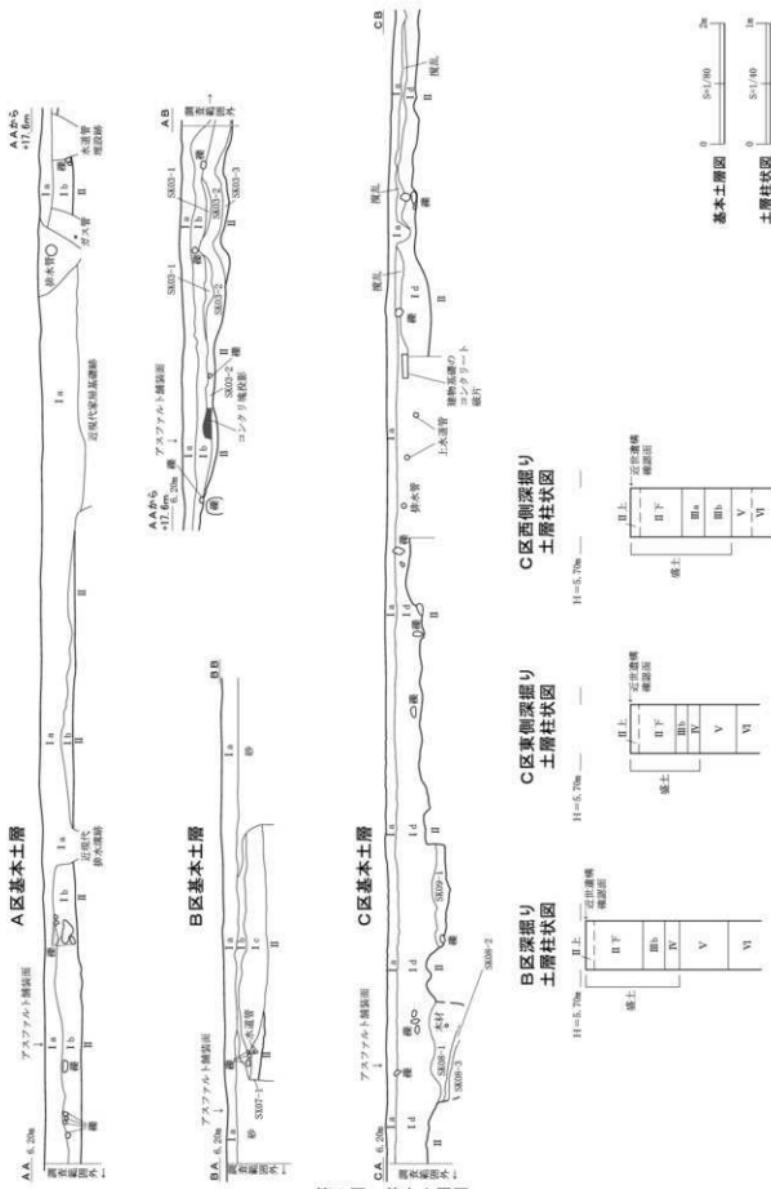
【重複関係】 なし。

【規模】 残存する長軸は6.48m、短軸1.48m、深さ0.24～0.46mである。

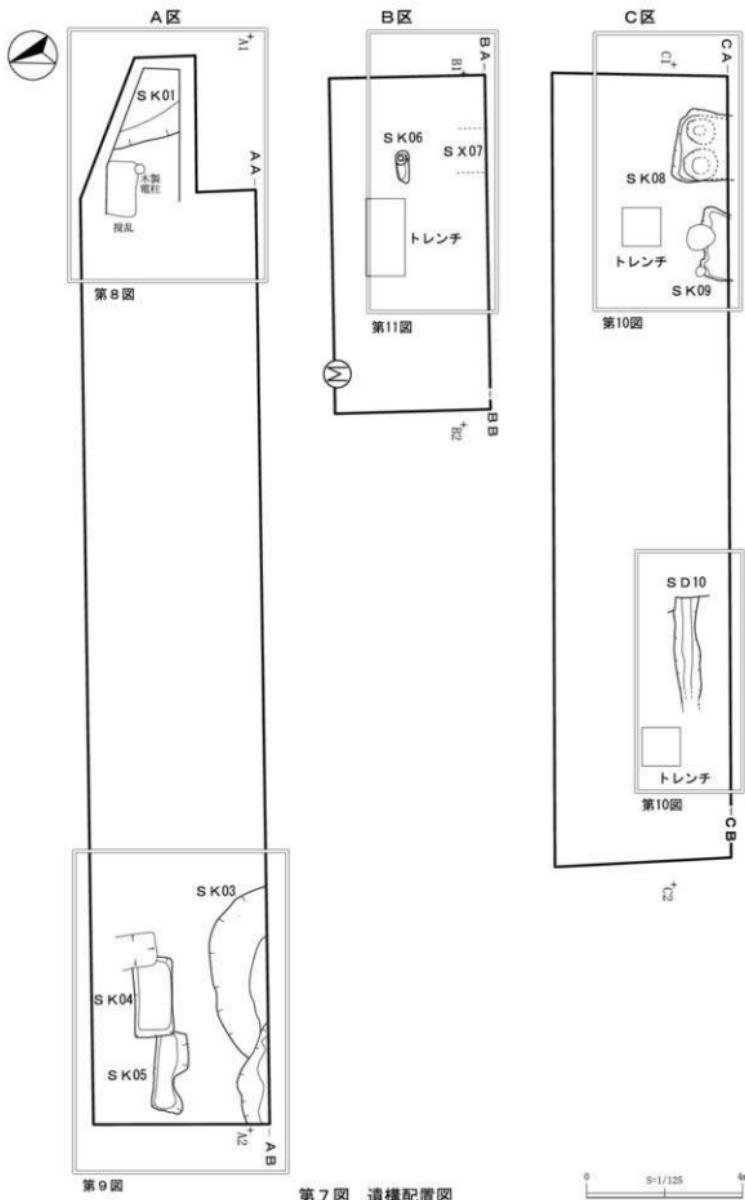
【形態】 平面は不整形を呈し、長軸方向はN-9°-Eである。断面形は、底面が波状で、壁



第5図 事業用地と調査範囲及び水準点位置図



第6図 基本土層図



第7図 遺構配置図

は緩やかに立ち上がる。

【堆積土】 3層に分けた。1層はI層土に由来し、礫と地山粘土を含む。2層は黒褐色で炭化物をわずかに含む砂質粘土。3層は木片及びグライ化した地山粘土ブロックが混入する、しまりのない黒色の層である。

【出土遺物】 陶磁器が出土した。陶器は、見込み蛇の目釉剥ぎの皿（第12図2）の他、白化粧土によって装飾された碗（第12図1）、二彩手の皿（第12図3）、磁器は、口縁部に口紅装飾をもつ碗（第12図4）が出土した。その他、磁器の碗1点（第12図5）、杯1点（第12図6）を図示した。

【所見・時期】 東側を南北に横断する水道管によって壊されているため、形態は判然としない。出土遺物から、廃絶時期は18世紀以降と考えられる。

S K04（第9・12・13・14図、図版2・3・5・6・8・9）

【位置】 A区西端より3m東側、S K05の東側に位置する。

【検出層位】 II層上面で検出した。

【検出状況】 I層除去後、東西方向に長い、礫を含んだ灰色粘土のプランを確認した。

【重複関係】 S K05を切っている。

【規模】 残存する長軸は2.04m、短軸1.00m、深さ0.22mである。

【形態】 平面形は隅丸方形を呈し、長軸方向はN-8°-Eである。断面形は、底面が平坦で、壁はやや急に立ち上がる。

【堆積土】 単層である。宅地造成の際に削平された旧表土の黒色土由来で、木片を多量に含む黒褐色土である。炭化物及び礫が混入しており、人為的な一括埋め戻し土である。

【出土遺物】 陶磁器、木製品、硯が出土した。陶器は、見込み蛇の目釉剥ぎの皿（第12図7）が出土した。磁器は、蛇の目四台高台のもの（第13図12）や、同じく蛇の目四台高台で、型打ち成形の皿（第13図16）、景德鎮の碗（第12図10）等が出土した。木製品は、下駄の歯が2点出土した（第14図19・20）。硯（第14図18）は粘板岩製で大部分が欠損している。その他、陶器の鉢1点（第12図8）、磁器の皿5点（第12図9・11、第13図13～15）、瓶1点（第14図17）を図示した。

【所見・時期】 規模や底面の状況から、地下室の可能性が考えられる。出土遺物から、廃絶時期は18世紀前半以降と考えられる。

S K05（第9・14・15図、図版2・3・7）

【位置】 A区西端でS K04の西側に位置する。

【検出層位】 II層上面で検出した。

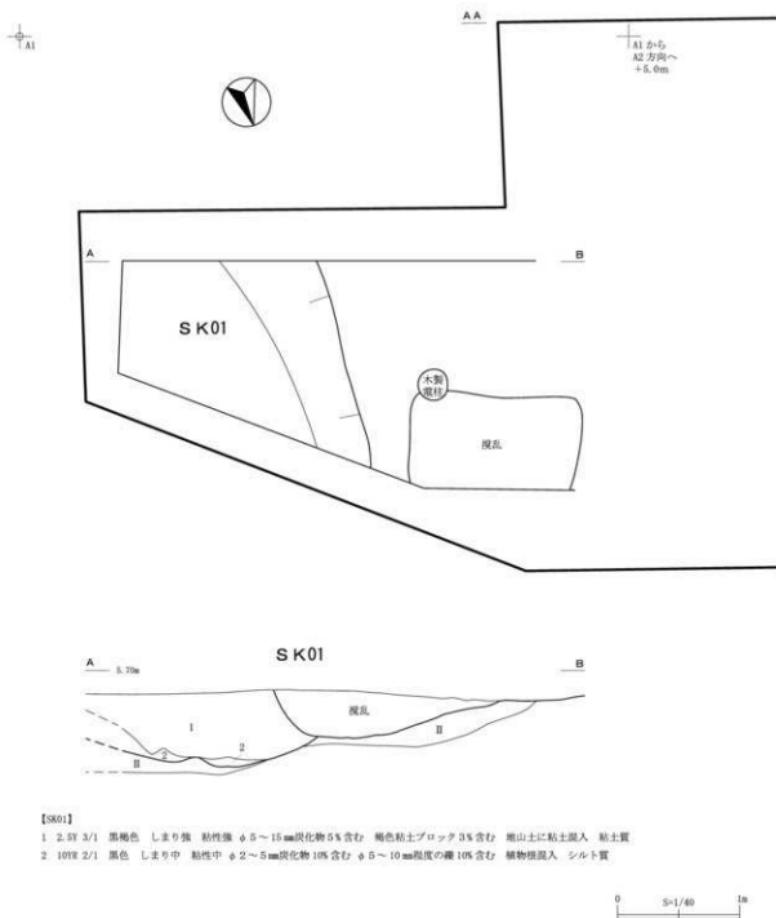
【検出状況】 S K04の西側に灰黄褐色のプランとして確認した。

【重複関係】 S K04に切られている。

【規模】 残存する長軸は1.88m、短軸0.86m、深さ0.26mである。

【形態】 平面は不整形を呈し、長軸方向はN-10°-Eである。断面形は底面に礫が多く、壁はやや急に立ち上がる。

【堆積土】 単層である。旧表土由来の黒色土をまだらに含む黄褐色土で、粘性が強い。拳大か



第8図 SK01

ら人頭大の礫や砂が混じる、人為的な一括埋め戻し土である。

【出土遺物】 陶磁器、土製品が出土した。磁器は、呉須で装飾された皿（第14図24）や草花文が描かれた皿（第14図26）、被熱した香炉（第15図27）が出土した。土製品は、瓦（第15図28）が1点出土した。その他、陶器の皿、鉢、壺・甕を各1点（第14図21～23）、磁器の皿1点（第14図25）を図示した。

【所見・時期】 坑内からは拳大から人頭大ほどの白色の礫が多量に出土した。意図的に敷き詰めた可能性がある。出土遺物から、廃絶時期は17世紀後半以降と考えられる。

S K08 (第10・15・16・17図、図版4・5・6・9・10・11・12)

【位置】 C区東端から約2m西側に位置する。

【検出層位】 II層上面で検出した。

【検出状況】 黒色土のプランを確認した。

【重複関係】 なし。

【規模】 残存する長軸は1.18m、短軸1.36m、深さ0.66mである。

【形態】 平面形は不整形を呈し、長軸方向はN-13°-Eである。断面形は底面が凹凸で、壁はやや急に立ち上がる。

【堆積土】 3層に分けた。1層はI層土由来の砂混じりの粘土質土。2層は木片を多量に含む砂混じりの粘土質土。3層は1・2層よりも炭化物と小礫を多く含む粘土質土である。2・3層は人為堆積であるが、1層は後世の沈み込みの堆積土である。

【出土遺物】 陶磁器、漆器、木製品、金属製品、種子が出土した。陶器は、縁なぶり成形で口縁部が波状の皿（第15図30）や、白化粧土と刷毛目による装飾が施された瓶（第15図32）、壺・甕（第15図33）が出土した。磁器は、二重網目文と一重網目文が描かれた碗（第15図34）や、裏銘がある皿（第16図35）が出土した。その他、陶器の鉢、瓶を各1点（第15図31・32）、磁器の筒型容器1点（第16図36）を図示した。木製品は、紡錘車（第16図37）の他、下駄（第17図46・47）、穿孔をもつ杭（第16図40）、加工痕が認められる板材（第16図41）、箸（第17図43・44・45）が出土した。また、金属製品は、1700年代後半から1800年代の煙管の雁首（第17図48）や、建具の部品と考えられる金具（第17図49）が出土した。種子は、理化学的分析結果によると、栽培種のモモ2点、アンズ、ウメ、ニホンカボチャ近似種が各1点、非栽培種のマツ属複維管束亜属の球果1点、種鱗1点、オニグルミ1点が出土した（第4章第1節）。

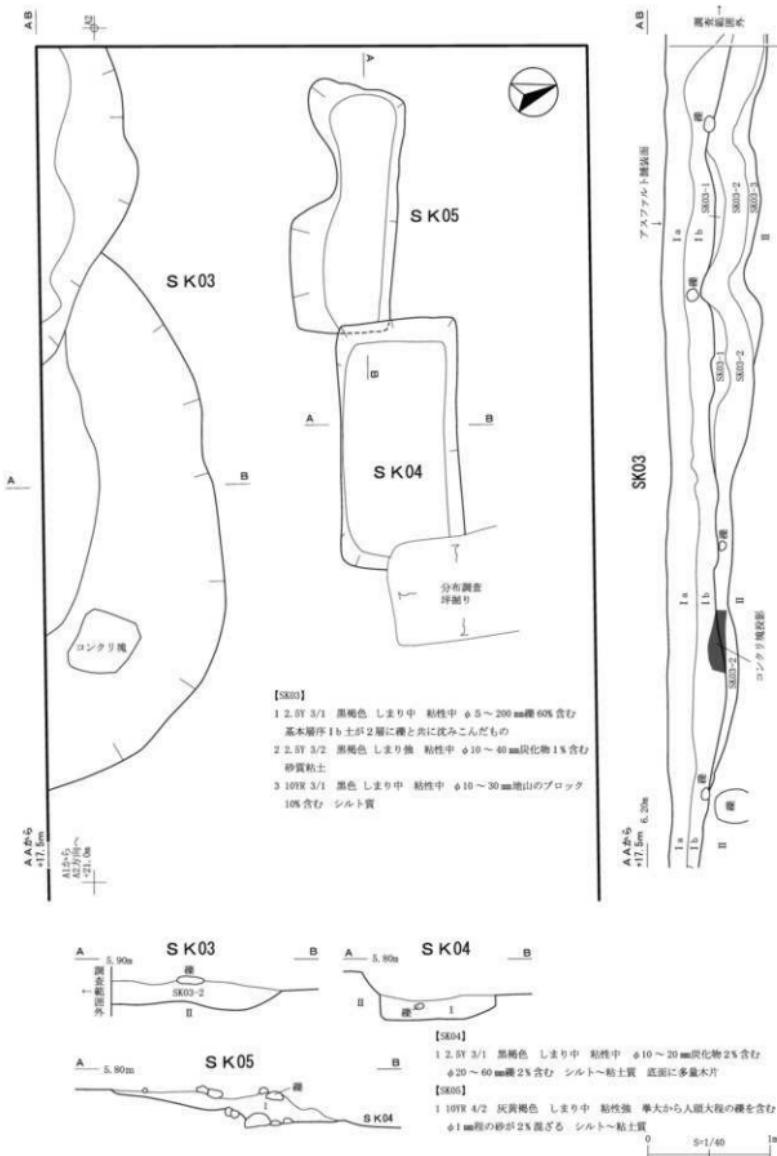
【所見・時期】 規模と出土遺物から、ゴミ穴の可能性がある。ただし、南側は調査範囲外となり規模及び形態の詳細は不明である。出土遺物から、廃絶時期は18世紀後半から19世紀以降と考えられる。

S K09 (第10・18図、図版4・10・12)

【位置】 C区東端より4m西側の南側壁際に位置する。

【検出層位】 II層上面で検出した。

【検出状況】 黒色土の方形プランを確認した。



第9図 SK03・SK04・SK05

【重複関係】	なし。
【規模】	残存する長軸は1.84m、短軸0.68m、深さ0.30mである。
【形態】	平面形は不整形を呈し、長軸方向はN-8°-Eである。断面形は底面がやや凹凸で、壁はやや急に立ち上がる。
【堆積土】	単層である。旧表土由来の黒色土が混じるオリーブ黑色土で、礫の混入がみられる。人為的な一括埋め戻し土である。
【出土遺物】	磁器、木製品、金属製品、種子が出土した。磁器は、呉須で蜻唐草文が施された瓶（第18図52）、植物が描かれ、縁部分が無釉の蓋（第18図51）が出土した。その他、磁器の皿、瓶、その他各1点（第18図50・53・54）を図示した。木製品は、箸（第18図55）が1点出土し、金属製品は、鋸が付着した1750年代後半から1800年代の煙管の吸い口部分（第18図56）が出土した。種子は、理化学的分析結果によると、スマモ3点、モモ1点が出土した（第4章第1節）。
【所見・時期】	規模と出土遺物から、ゴミ穴の可能性がある。ただし、北側は一部を搅乱で壊され、南側は調査範囲外となり規模及び形態の詳細は不明である。出土遺物から、廃絶時期は18世紀後半から19世紀と考えられる。

（2）溝跡

S D 10（第10・18図、図版4）

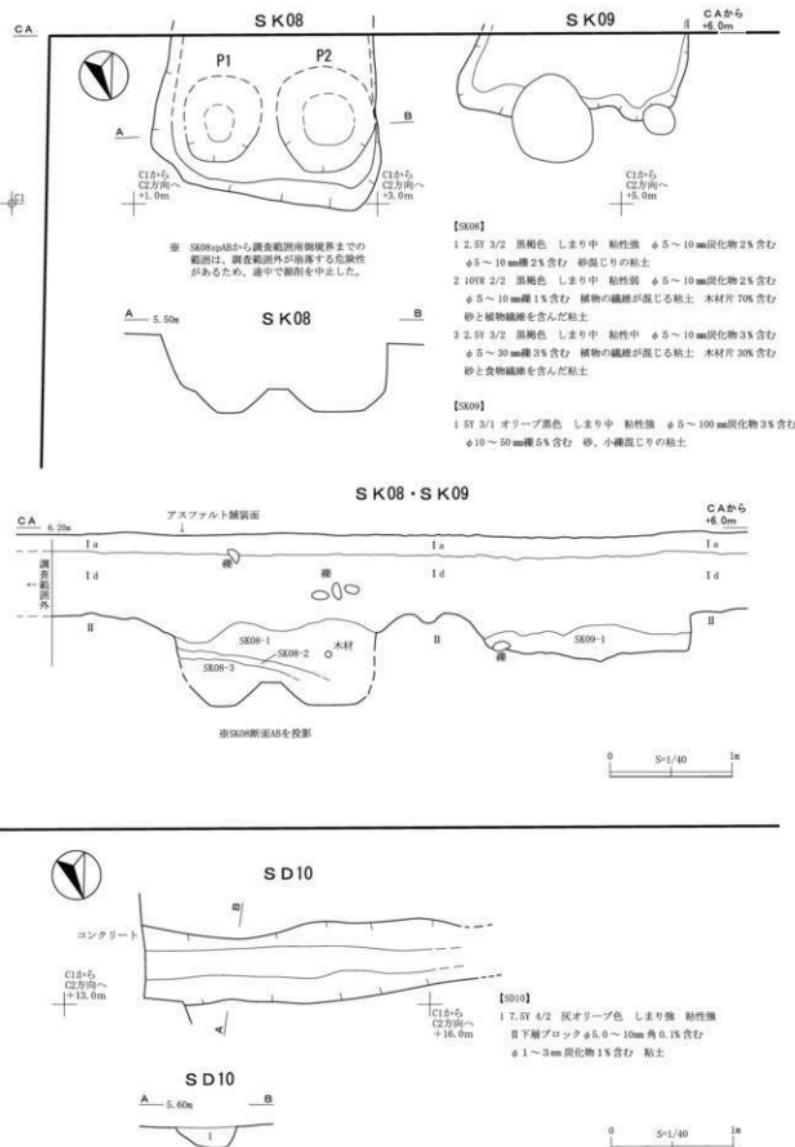
【位置】	C区西端から5m東側に位置する。
【検出層位】	II層下面で検出した。
【検出状況】	I層除去後、II層下面で、東西方向に延びる幅0.5m程の溝状のプランを確認した。
【重複関係】	なし。
【規模】	残存する長さは2.36m、幅0.50～0.66m、深さ0.20mである。
【形態】	平面形は、東西方向に直線的に伸びている。長軸方向はN-6°-Eである。断面形は底面が丸みを帯び、壁が緩やかに立ち上がる。
【堆積土】	単層である。宅地造成の際に削平された旧表土由来の黒色土とII層上層土とが混和した灰オリーブ色土である。II層下層土ブロックを含み、人為的な一括埋め戻し土である。
【出土遺物】	陶器が出土した。陶器は、黒釉がかけられた壺・甕（第18図57）、磁器は、内外に一重網目文が描かれた碗（第18図58）が出土した。
【所見・時期】	II層下面でプランを確認したが、断面観察からII層上面から掘り込まれていることがわかった。排水路や区画等により壊されている。出土遺物から、廃絶時期は18世紀後半から19世紀以降と考えられる。

3 大正～昭和初期の遺構

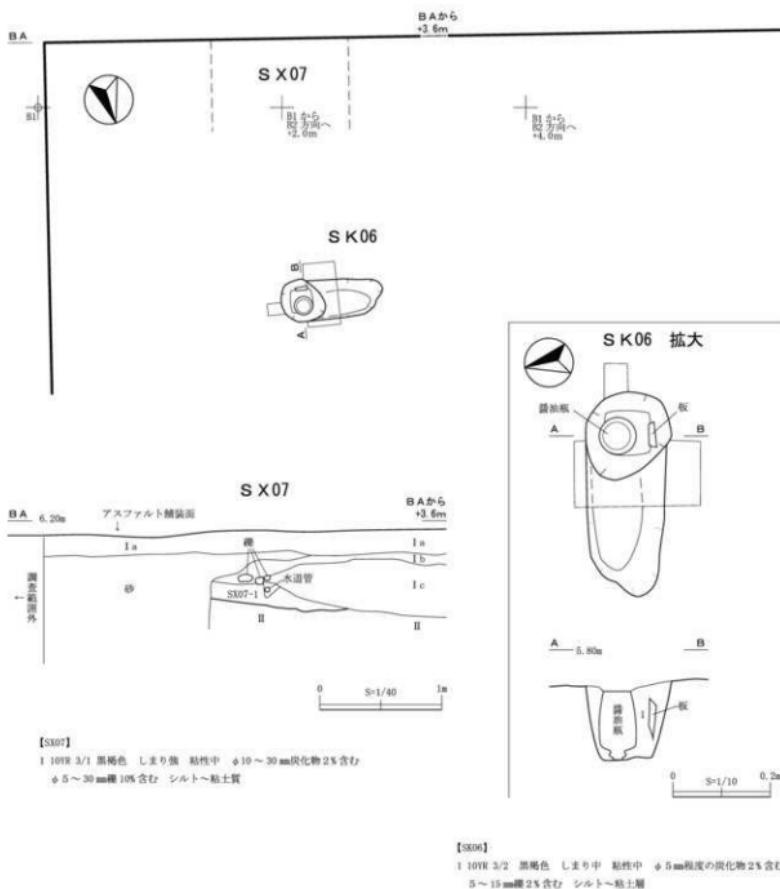
（1）土坑

S K 06（第11・27図、図版3・5・10・11・12）

【位置】	B区東端から2m西側に位置する。
------	------------------



第10図 SK08・SK09・SD10



第11図 SK06・SX07

【検出層位】	II層上面で検出した。
【検出状況】	I層除去後、精査中に不整形の黒色土の楕円形プランを確認した。
【重複関係】	なし。
【規模】	残存する長軸は0.84m、短軸0.34m、深さ0.34mである。
【形態】	平面形は不整形を呈し、長軸方向はN-5°-Eである。断面は底面が平坦である。壁は急に立ち上がり、やや外反する。
【堆積土】	単層である。宅地造成の際に削平された旧表土由来の黒色土である。しまり・粘性は弱い。炭化物及び礫が混入しており、人為的な一括埋め戻し土である。
【出土遺物】	ベルト西側を截ち割ったところ、醤油瓶、板材、金属製品が出土した。醤油瓶（第27図107）は逆位の状態で出土し、陶製である。表面に鉄軸で文字と記号が書かれている。醤油瓶の由来については、第5章に記述する。その他、杭（第27図108）と板材（第27図109）は、加工痕が確認できる。金属製品は、棒状の素材を楕円形に曲げた金具（第27図110）が出土した。
【所見・時期】	醤油瓶を埋設した土坑である。醤油瓶の年代から、廃絶時期は大正から昭和初期と考えられる。

4 時期不明の遺構

(1) 性格不明遺構

S×07（第11図、図版3）	
【位置】	B区東端より2m西側に位置する。
【検出層位】	II層上面で検出した。
【検出状況】	南壁の基本土層で確認した。確認面で平面的にプランを確認できなかった。
【重複関係】	なし。
【規模】	深さ0.24mである。
【形態】	詳細は不明である。
【堆積土】	単層である。宅地造成の際に削平された旧表土の黒色土由来で、それよりもやや明るい黒褐色土である。I層の礫が沈み込んでいる。
【出土遺物】	なし。
【所見・時期】	分布調査で検出されていたが、水道管、敷設工事等で底面が壊されているため、詳細及び時期は不明である。

5 遺構外出土遺物

(1) 陶器

出土した陶器中、8点を掲載した。主に肥前産の碗・皿・鉢・擂鉢が出土した。擂鉢（第20図66）は、叩き成形の後、表面を撫でつけて整えている。内側に砂が付着しており、高台疊付きに砂を敷いて重積をする砂敷き窯詰めの痕跡と考えられる。底面は内側からの敲打により穴が開けられている。もう1点の擂鉢（第19図60）は堺産である。皿は、胎土目積みの痕跡が残るもの（第19図61）や、見

込み蛇の目釉剥ぎが施されているもの（第19図63）等、窯詰め方法が推測できるものが出土した。また、素地に盛った白化粧土を櫛で搔き、波状の刷毛目文を施す装飾が用いられた鉢（第19図64）と皿（第19図62）が出土した。

（2）磁器

出土した磁器中、34点を掲載した。肥前産の碗・皿・小杯・猪口・香炉が主体だが、中国産の碗（第23図84）も1点出土した。出土した見込み蛇の目釉剥ぎの皿5点中、4点（第22図76・77・79、第24図98）は肥前の波佐見産である。なお、第22図79は「くらわんか」で、見込み部分に黒色の付着物がある。ロクロ成形や糸切り成形、型打ち成形等、磁器の成形方法は多様で、第21図67の皿は糸切り成形された後、型紙摺りによって蛸唐草文が装飾されている。また、17世紀後半～18世紀後半において特徴的な装飾技法であるコンニャク印判や、型紙摺り等の印刷技法が用いられたものも出土した。前述した第21図67の他、見込みにコンニャク印判による五弁花文がある皿（第24図97・99）がその例である。そして17世紀中葉～後葉から広く一般的になった高台内銘款であるが、これも出土した碗（第21図73、第23図86・90、第24図93）や皿（第24図97・99）にそれぞれ「大明年製」等の銘が確認できる。その他、人物やコウモリが描かれた香炉（第21図68）が出土した。

（3）土器

ロクロ成形のものが2点出土した（第25図101・102）。

（4）木製品

江戸時代後半と考えられる連歛下駄（第26図103）が出土した。緒孔は3か所あり、先端にのめりが確認できる。

（5）土製品

七輪の一部が2点（第26図104・105）出土した。第26図104は一部欠損した火皿で、第26図105は全体的に被熱した口縁部である。

（6）石製品

硯（第26図106）が出土した。一部欠損している。粘板岩製で、海部に墨の付着が確認できる。裏面に「正徳六年」「此□□□」「高嶋石」「銀左衛門」「丙申二月廿五 □拾文」と刻書されている。

（7）ガラス製品

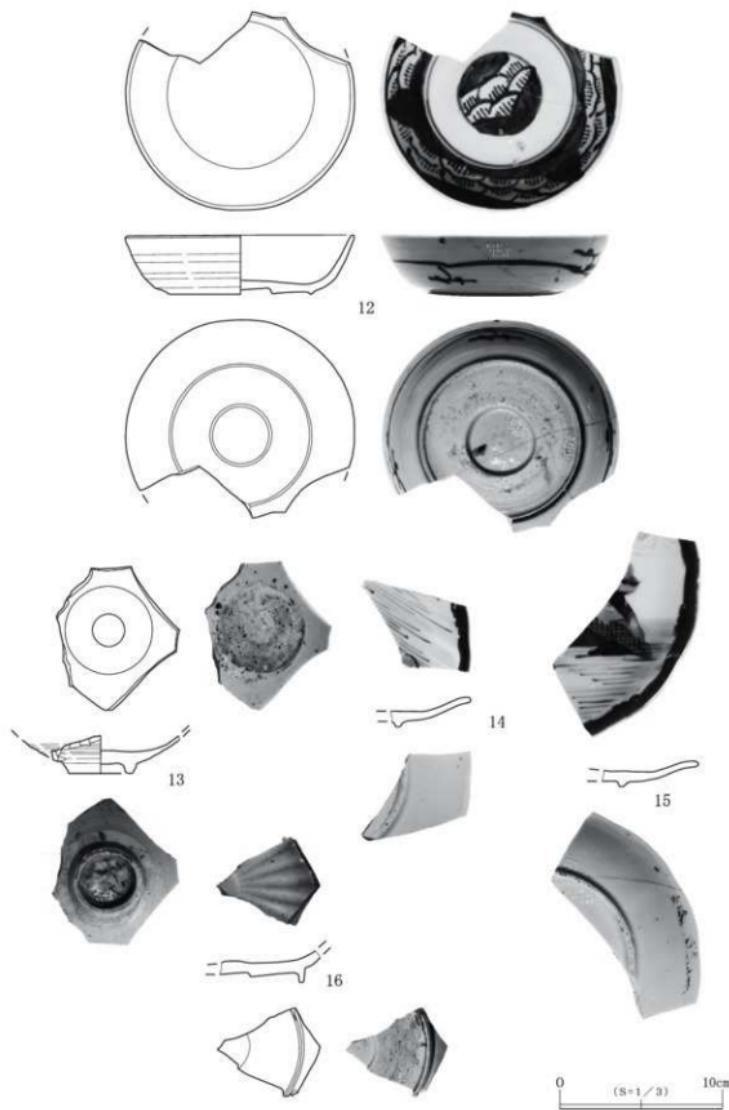
ガラス製の高さ7.5cm程の青色の瓶（図版12-111）が出土した。瓶表面に「美顔水」とあることから、化粧水瓶であると推測する。

参考文献

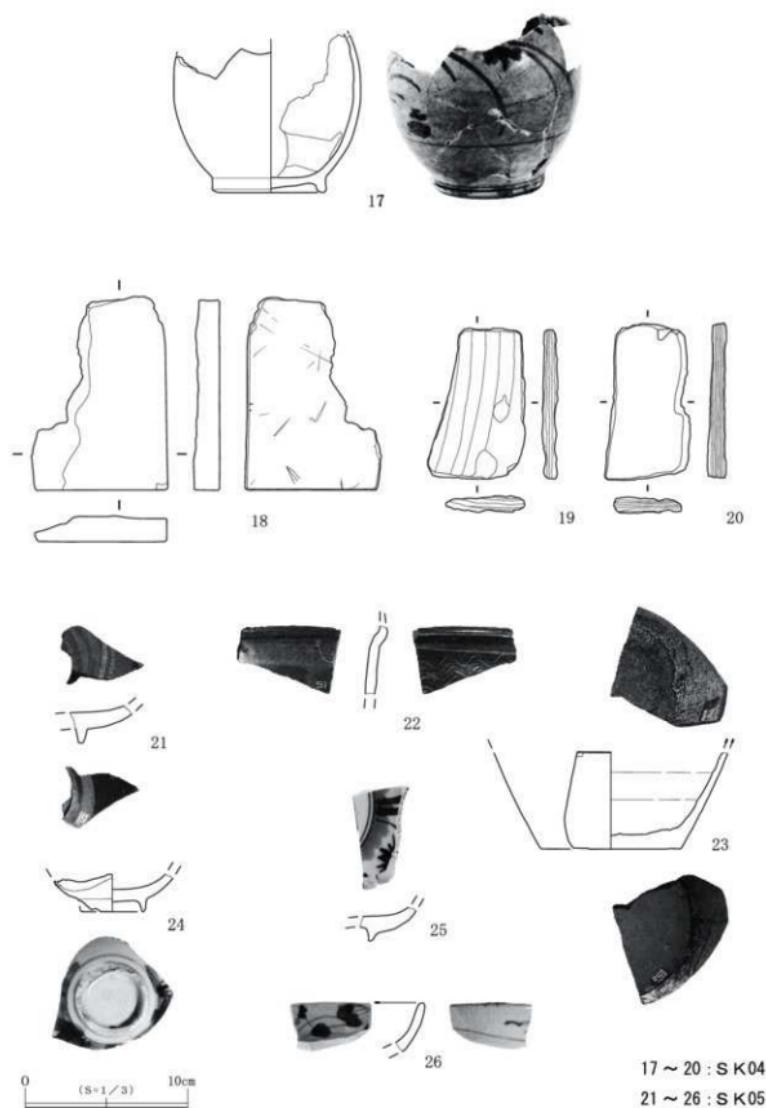
- 九州近世陶磁学会 「九州陶磁の癡年一九州近世陶磁学会10周年記念一」 九州近世陶磁学会 2000（平成12）年
- 市田京子 「江戸時代の下駄」「江戸文化の考古学」 江戸遺跡研究会 2000（平成12）年 26-54頁
- 大橋康二 「考古学ライブライアリ-55 肥前陶磁」 ニュー・サイエンス社 1989（平成元）年
- 古泉 弘 「喫煙2 煙管」「江戸考古学研究事典」 江戸遺跡研究会 2001（平成13）年 188-190頁
- 堀内秀樹 「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」「東京大学構内遺跡調査研究年報 1」 東京大学理学文化財調査室 1997（平成9）年 279-305頁
- 堀内秀樹 「江戸遺跡出土陶磁器の段階設定とその画期」「竹下健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論文集」 竹下健二先生・澤田大多郎先生の還暦を祝う会 2000（平成12）年 213-231頁



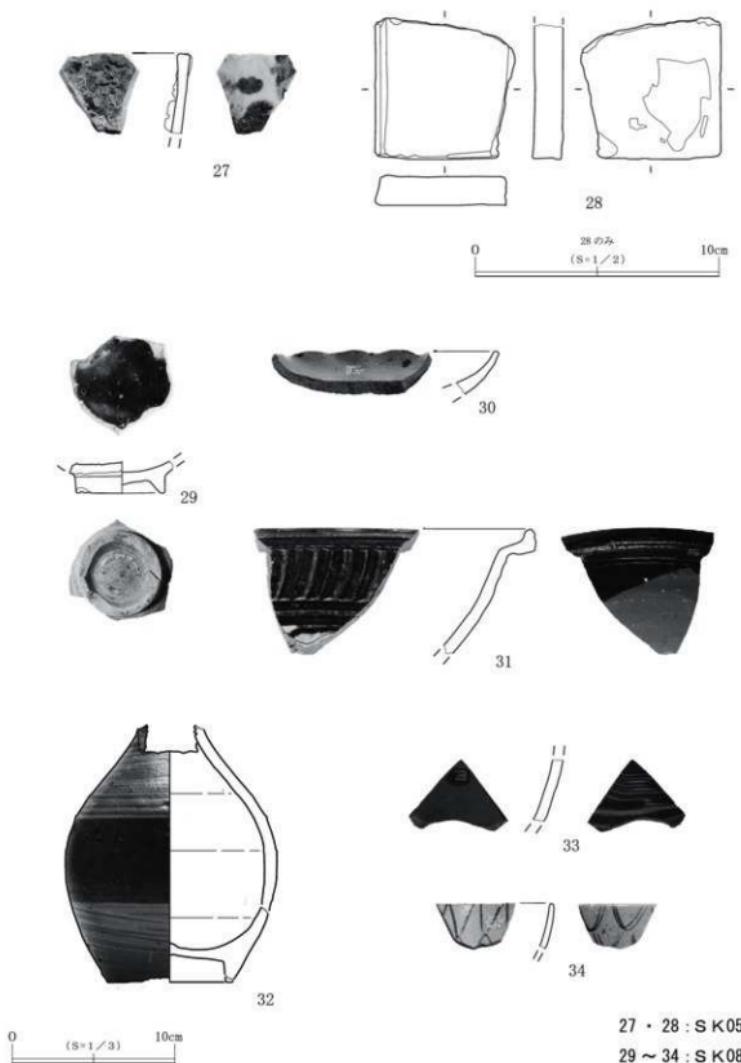
第12図 造構内出土遺物 SK03・SK04(1)



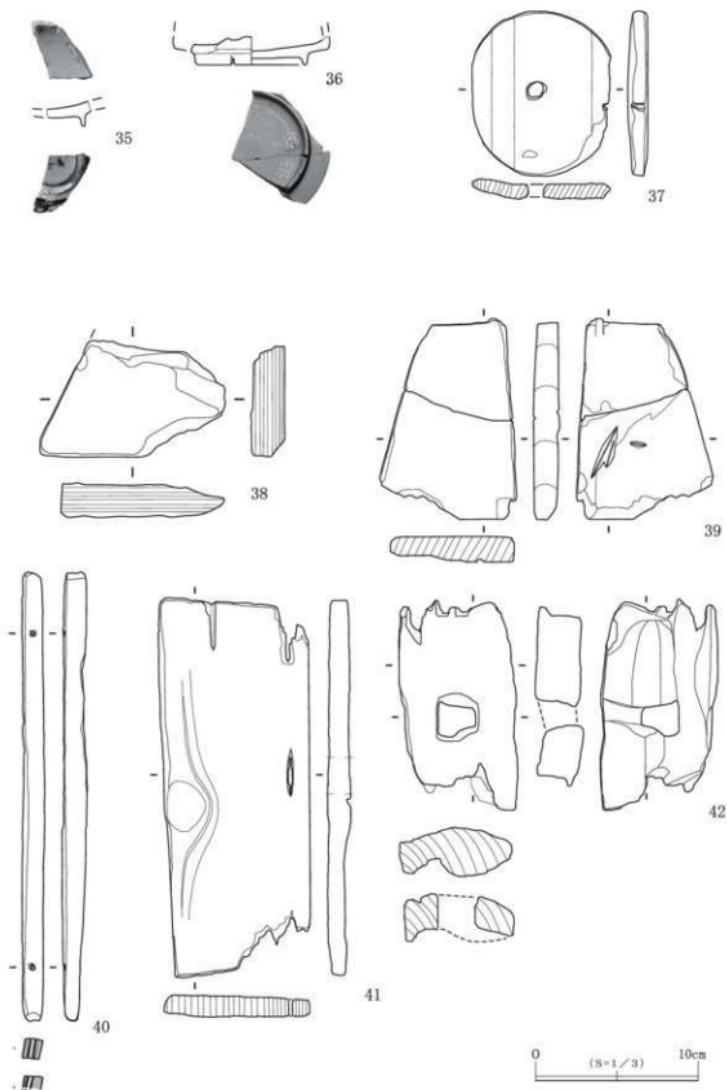
第13図 遺構内出土遺物 SK04 (2)



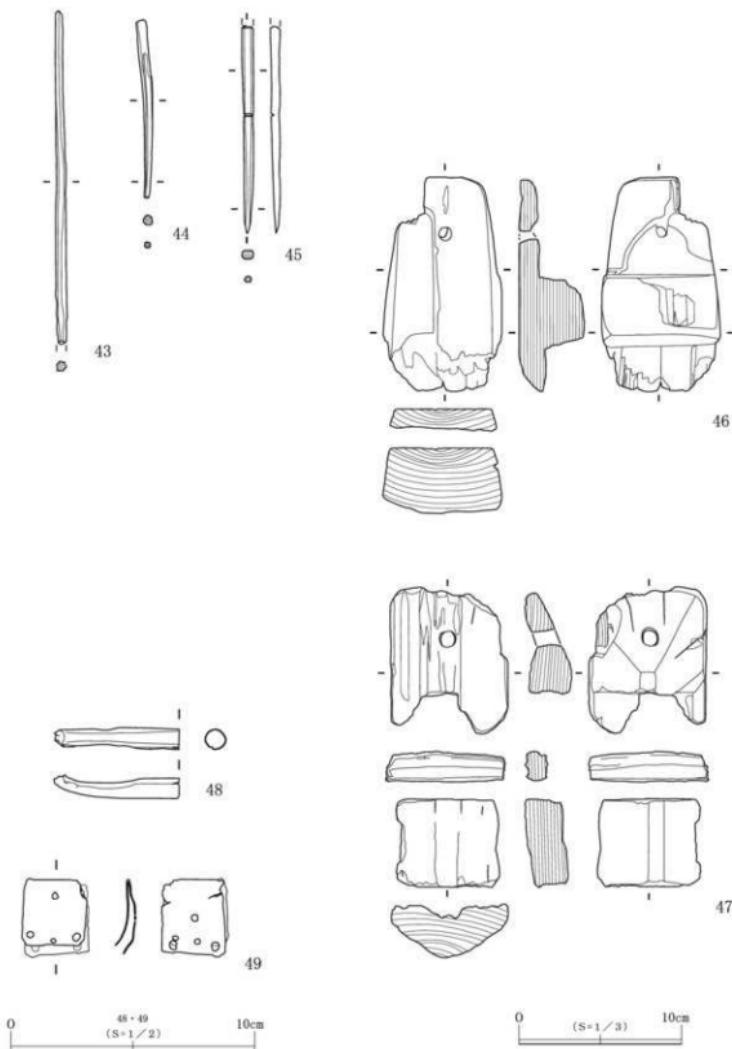
第14図 遺構内出土遺物 SK04 (3)・SK05 (1)



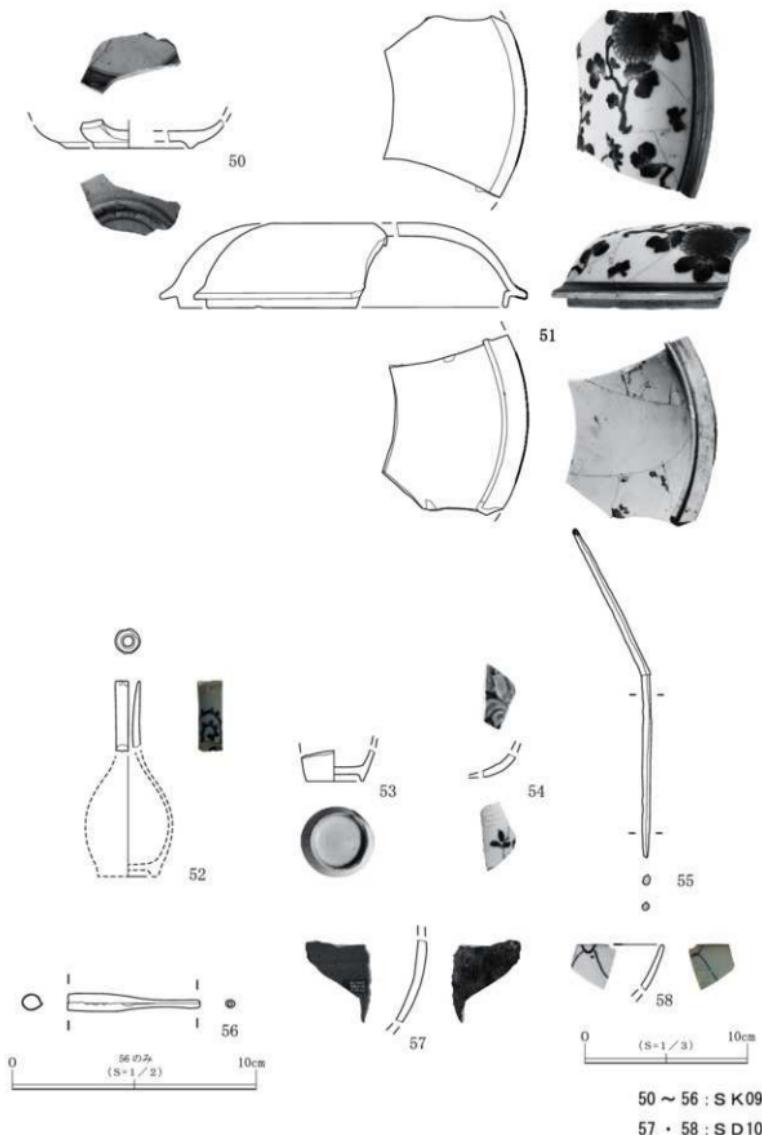
第15図 遺構内出土遺物 SK05 (2)・SK08 (1)



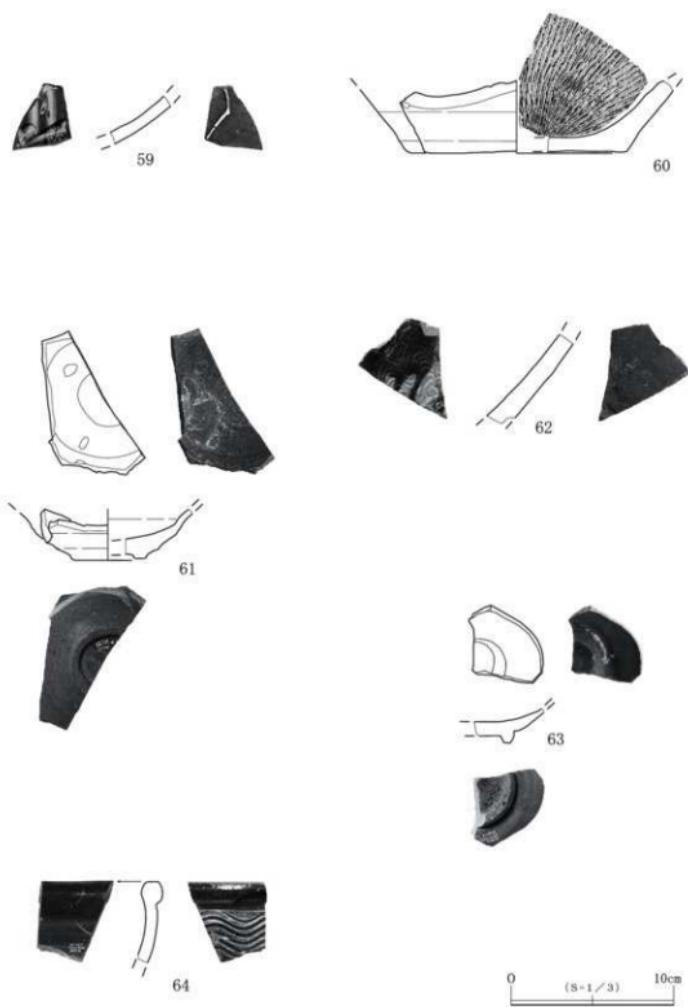
第16図 遺構内出土遺物 SK08 (2)



第17図 遺構内出土遺物 SK08 (3)



第18図 遺構内出土遺物 SK09・SD10



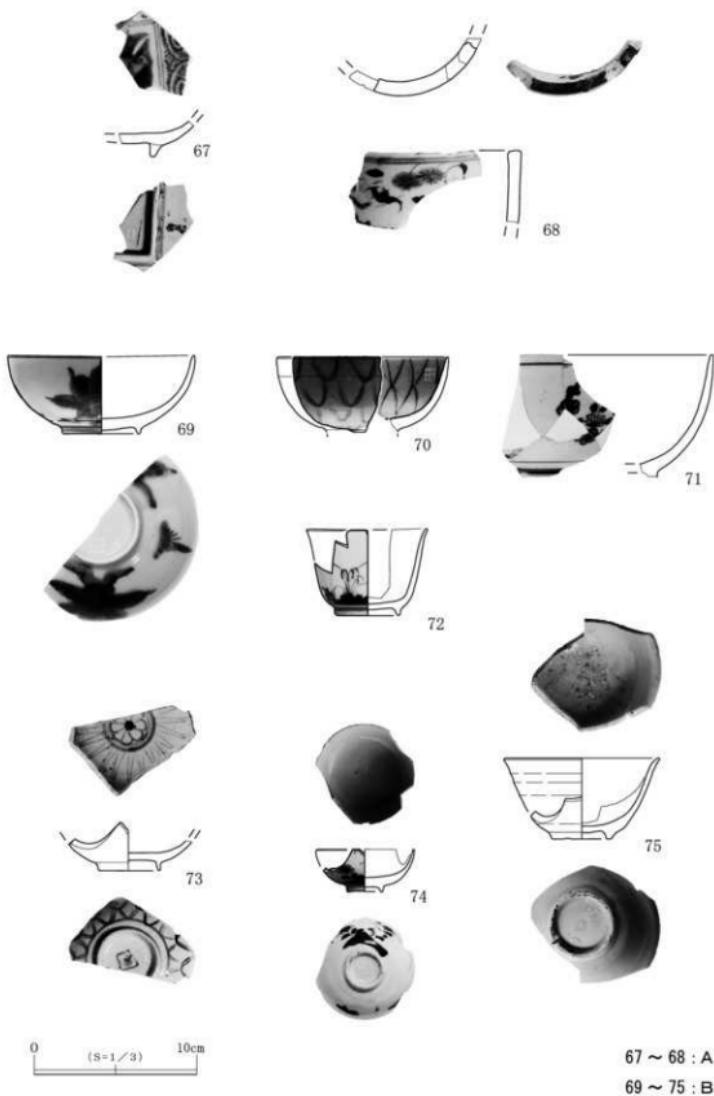
59・60:B区
61~64:C区

第19図 遺構外出土遺物 陶器 B区・C区

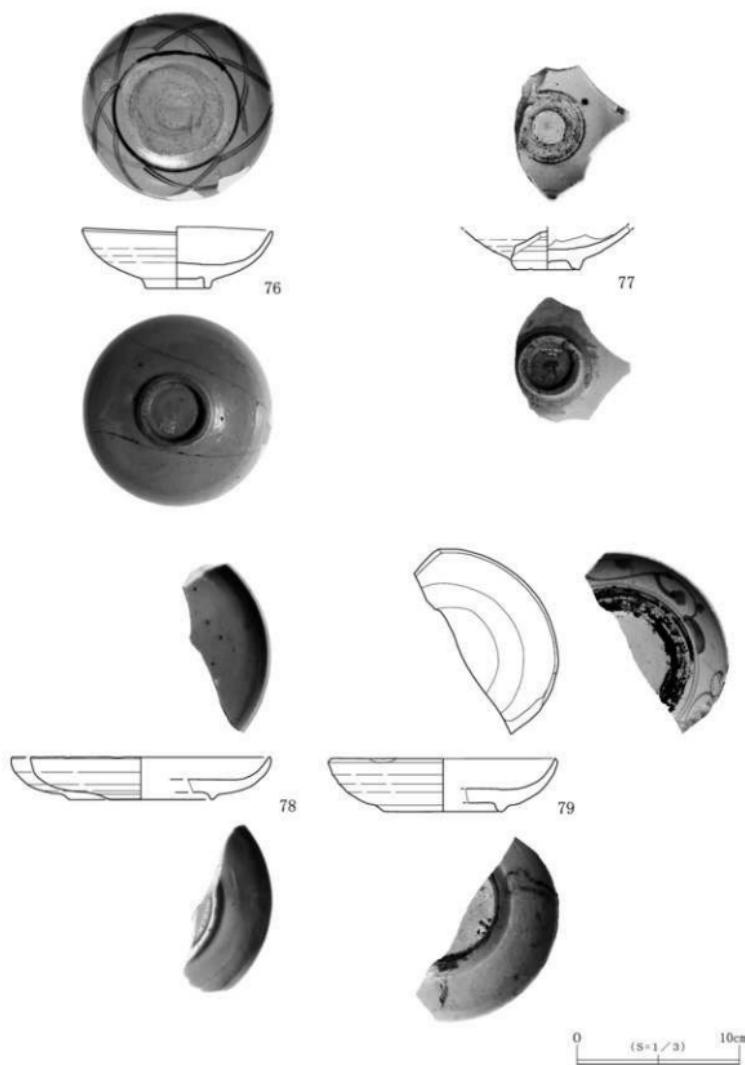


0 (S=1/3) 10cm

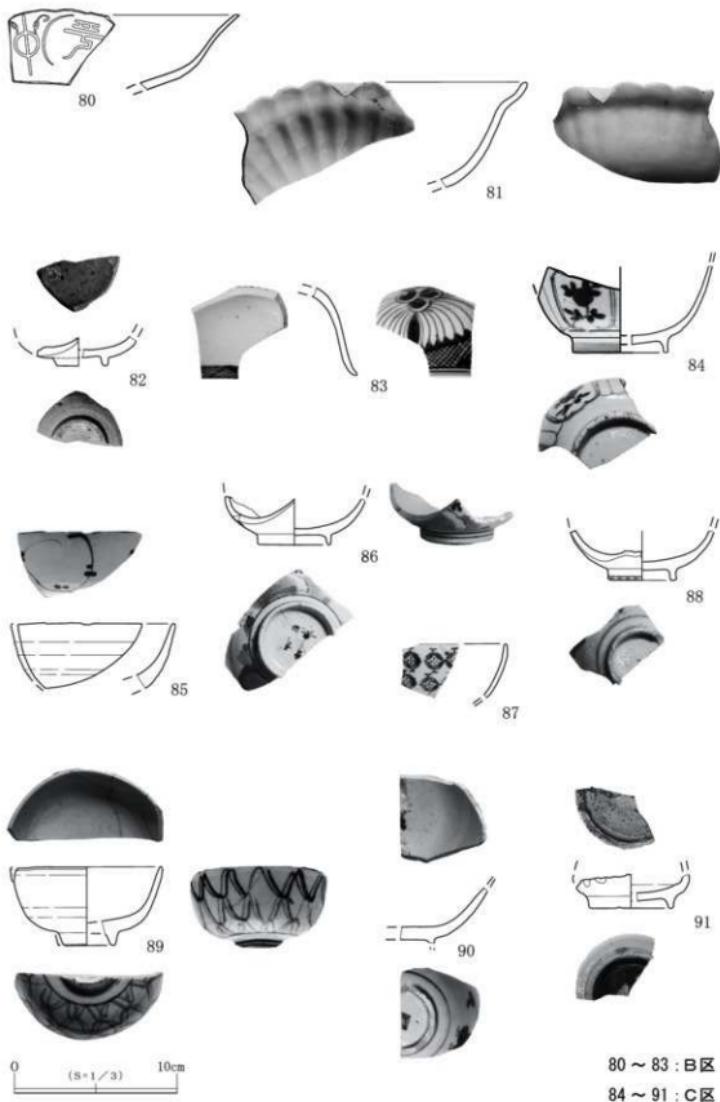
第20図 造構外出土遺物 陶器 分布調査



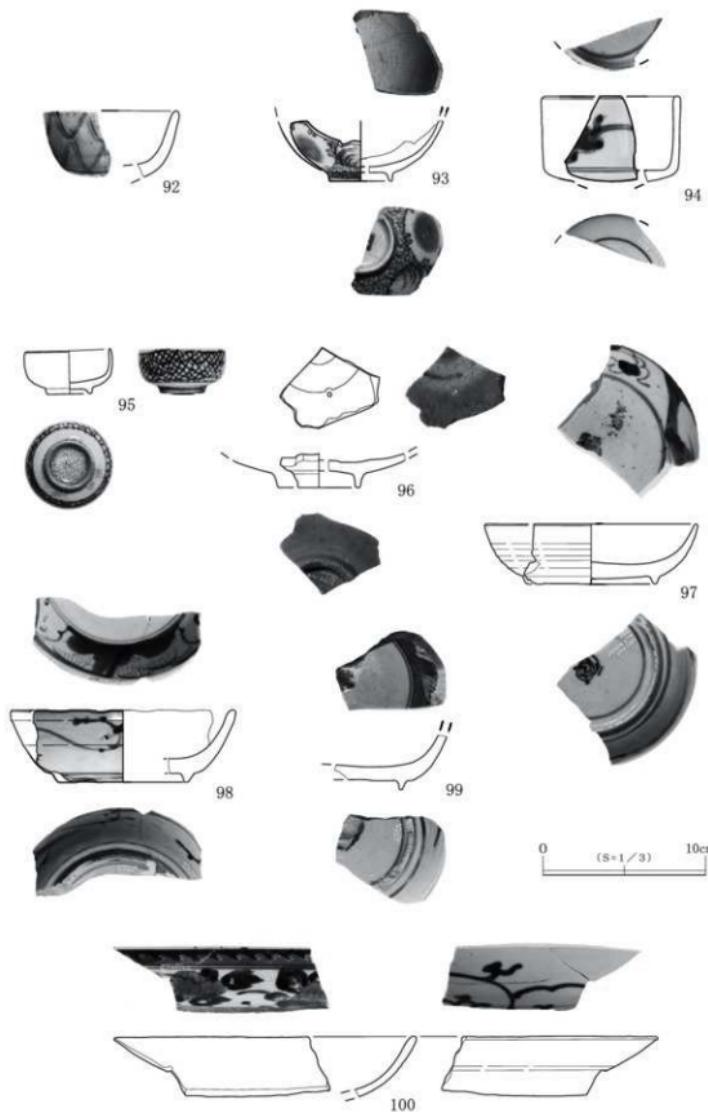
第21図 遺構外出土遺物 磁器 A区・B区 (1)



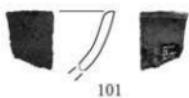
第22図 遺構外出土遺物 磁器 B区（2）



第23図 遺構外出土遺物 磁器 B区(3)・C区

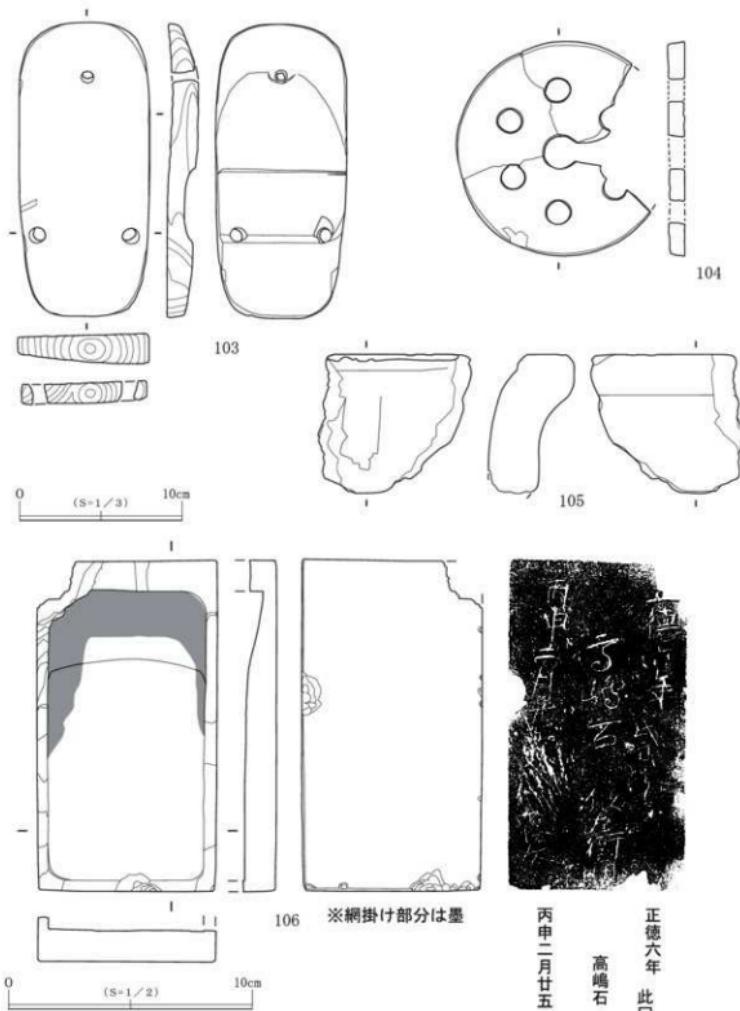


第24図 遺構外出土遺物 磁器 分布調査



0 (S=1/3) 10cm

第25図 遺構外出土遺物 土器 日区

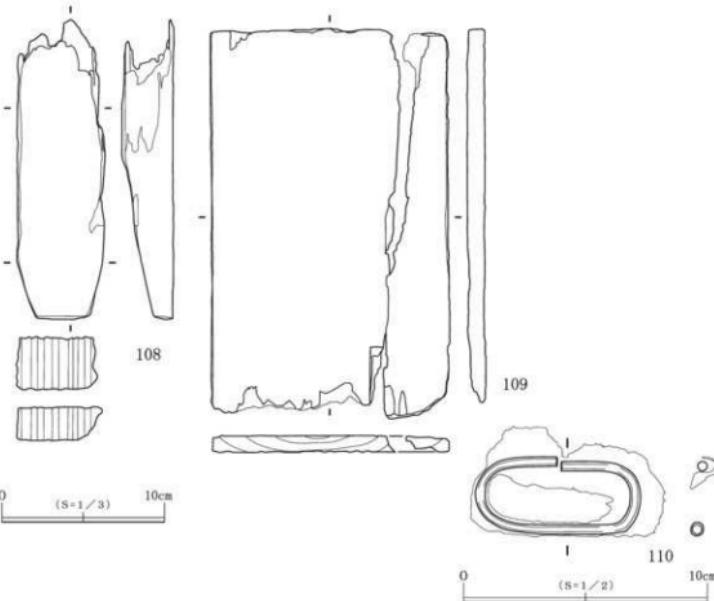


103 : A区
104・106 : B区
105 : 分布調査

丙申二月廿五「」口拾文
正徳六年此口口
高嶋石 銀左衛門



107



第27図 遺構内出土遺物 SK06

第4表 掘出出土遺物一覧表（1）

博認番号	回収番号	器種	種別	出土位置	度地	重量(g)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	年代	
12 1	-	碗	陶器	SK03	2層	肥前	15.2	-	-	(残存値) 4.0 白化粗土。刷毛目施釉。	1650～1690年代	
12 2	6	皿	陶器	SK03	2層	-	13.0	(推定値) 13.0 (推定値) 4.8 (残存値) 2.3	-	足込み蛇の目施調ぎ。縁部に施釉。	17C 後半～内野山。	
12 3	-	皿	陶器	SK03	2層	肥前	19.1	-	-	(残存値) 0.8 外面部無釉。二彩手。	17C 後半	
12 4	-	碗	磁器	SK03	2層	肥前	12.1	(推定値) 10.8 (残存値) 6.6 (残存値) 4.4	-	内外透明釉で施釉。口縁部に口紅装飾。	1650～1690年代	
12 5	-	碗	磁器	SK03	2層	肥前	6.8	(推定値) 9.9 (推定値) 7.5 (残存値) 2.5	-	内外透明釉で施釉。花唐草文。	17C 後半	
12 6	-	杯	磁器	SK03	2層	-	36.5	(推定値) 7.9 (推定値) 3.4 (残存値) 5.3	-	握付き輪調ぎ。内外透明釉で施釉。	18C 中	
12 7	6	皿	陶器	SK04	1層	肥前	75.2	(推定値) 10.2 (残存値) 4.8 (残存値) 2.4	-	足込み蛇の目施調ぎ。内面部無釉で施釉。内野山。	1650年代以降	
12 8	-	鉢	陶器	SK04	1層	肥前	36.5	-	-	(残存値) 2.1 外面のみ施釉。ロクロ成型。	1650～1690年代	
12 9	6	皿	磁器	SK04	1層	肥前	26.5	(推定値) 8.1 (推定値) 4.0 (残存値) 1.6	-	内外透明釉で施釉。握付き輪調ぎ。足込みにコンニャク印押と草花文。	18C 前半	
12 10	6	碗	磁器	SK04	1層	中國	17.6	(推定値) 7.3 (推定値) 4.9 (残存値) 2.6	-	茎足調ぎ。握付き輪調ぎ。骨付いた瓶。内外透明釉で施釉。足込みに文様。茎部。	-	
12 11	6	皿	磁器	SK04	上面	肥前	25.9	(推定値) 12.4 (推定値) 8.0	2.8	骨付いた輪調ぎ。内外透明釉で施釉。口縁部に口紅装飾。内面に乳突。足込みと内縁にコンニャク印押。	1690年代	
13 12	6	皿	磁器	SK04	1層	肥前	176.4	14.1	8.8	3.65 瓶の口円錐高台。高台部長い。内外透明釉で施釉。内面部全体に施釉。外面上に草花文。	18C 前半以降	
13 13	6	皿	磁器	SK04	1層	肥前	62.8	(推定値) 9.8 (残存値) 3.9	-	足込み蛇の目施調ぎ。高台を除き内外透明釉で施釉。波状足。	1650～1690年代以降	
13 14	-	皿	磁器	SK04	1層	肥前	30.3	-	(推定値) 9.8 (残存値) 1.8	骨付いた輪調ぎ。内外透明釉で施釉。内面上に乳突。神田12-12と接合。	18C	
13 15	-	皿	磁器	SK04	1層	肥前	73.4	-	(推定値) 9.1 (残存値) 1.6	骨付いた輪調ぎ。内外透明釉で施釉。内面上に乳突。神田13-14と接合。	18C	
13 16	6	皿	磁器	SK04	1層	肥前	31.9	-	-	(残存値) 1.95 壺打ち瓶。瓶の口四形高台。高台部高い。内外透明釉で施釉。	18C 前半	
14 17	5	瓶	磁器	SK04	底面	肥前	220	(残存値) 10.7 (残存値) 6.5 (残存値) 9.7	-	骨付いた輪調ぎ。内外透明釉で施釉。内面上に乳突。外腹に草花文。足底からしている。内共に黒色の付着物。内面には黒色のようないちがいがある。	-	
14 18	8	瓶	石製品	SK04	1層	-	62.5	(残存値) 7.95 (残存値) 5.6 (最大値) 1.05	-	大瓶。瓶底呂製か。	-	
14 19	9	下駄	木製品	SK04	1層	-	35.6	(長さ) 9.3 (幅) 5.95 (厚さ) 1.0	-	画部分のみ。	-	
14 20	9	下駄	木製品	SK04	1層	-	35.5	(長さ) 9.45 (幅) 5.25 (最大値) 1.15	-	画部分のみ。	-	
14 21	-	皿	陶器	SK05	1層	肥前	18.1	-	(推定値) 5.3 (残存値) 1.9	足込み蛇の目施調ぎ。高台を除き内外透明釉。	1650～1690年代	
14 22	-	鉢	陶器	SK05	1層	肥前	25.0	-	-	内外施釉。外腹は素地に盛った白化粧土を糊で波状に引き継ぎ口縁に施す。	1650～1690年代	
14 23	-	壺・甕	陶器	SK05	1層	肥前	82.2	(推定値) 14.4 (推定値) 8.6 (残存値) 6.0	-	骨付いた輪調ぎ。内外透明釉で施釉。内面部及び底部外縁部に草花文。	-	
14 24	-	碗	磁器	SK05	1層	肥前	50.5	(推定値) 7.4 (推定値) 3.8 (残存値) 2.32	-	骨付いた輪調ぎ。内外透明釉で施釉。外腹に草花文。	17C後半以降	
14 25	-	皿	磁器	SK05	1層	肥前	20.9	-	(推定値) 6.5 (残存値) 1.7	骨付いた輪調ぎ。内外透明釉で施釉。内面部及び底部外縁部に草花文。	-	
14 26	-	皿	磁器	SK05	1層	肥前	15.2	-	-	(残存値) 2.9 内面部透明釉で施釉。内面上に草花文。	17C末～18C	
15 27	-	香炉	磁器	SK05	1層	肥前	28.8	-	-	(残存値) 4.9 (残存値) 7.7 (残存値) 15.8	頂部による装飾。外腹はざらざらしている。純熱によって釉が一度溶けた痕跡か。内面にも褐色の付着物をする。	-
15 28	7	瓦	土製品	SK05	1層	-	183.5	(長さ) 8.65 (幅) 8.6 (厚さ) 1.7	-	一部焼熱。	-	
15 29	-	碗	陶器	SK08	1層	-	56.6	-	(推定値) 5.2 (残存値) 2.0	内面部無釉。高台無釉。内野山か。	1580～1650年代	
15 30	-	皿	陶器	SK08	-	肥前	27.7	-	-	(残存値) 2.7 内面部透明釉で施釉。内面白化粧土に盛られた白化粧土による装飾。	1580～1650年代	
15 31	-	鉢	陶器	SK08	-	肥前か	101.1	-	-	(残存値) 9.2 内面部透明釉で施釉。液状の墨汁文を施す。	1600～1780年代	
15 32	5	瓶	陶器	SK08	-	肥前	520	(残存値) 4.1 (残存値) 7.7 (残存値) 15.8	-	ロクロ成型。白化粧土による装飾。	1600～1780年代	
15 33	-	壺・甕	陶器	SK08	-	肥前	19.8	-	-	ロクロ成型。内面部無釉。白化粧土による装飾。	1600～1780年代	
15 34	-	碗	磁器	SK08	1層	肥前	5.8	-	-	(残存値) 2.8 内面部透明釉で施釉。内面に重闇口文。虎斑。	1600～1780年代	
16 35	6	皿	磁器	SK08	-	肥前	11.6	-	(推定値) 4.3 (残存値) 1.5	骨付いた輪調ぎ。内外透明釉で施釉。	1600～1780年代	
16 36	-	指掌容器	磁器	SK08	1層	肥前	33.4	(推定値) 9.6 (推定値) 6.6 (残存値) 1.75	-	内外透明釉で施釉。骨付いた輪調ぎ。高台部分只短で装飾。	1600～1780年代	
16 37	10	精錬車	木製品	SK08	-	-	44.5	(長さ) 10.1 (直径) 8.55 (厚さ) 0.95	-	中心部に径1.0mほどの穿孔。	-	
16 38	9	下駄	木製品	SK08	-	-	28.5	(長さ) 4.8 (幅) 7.6 (厚さ) 1.35	-	画部分のみ。	-	

第5表 掲載出土遺物一覧表（2）

件名	図版番号	器種	種別	出土位置	出土層	産地	重量(g)	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	特徴	年代
16_39	9	下鉢	本製品	SK08	-	-	107.4	(長さ)12.4 (幅)8.4 (厚さ)1.55	歯部分のみ。	-	-	
16_40	10	杭か	本製品	SK08	-	-	36.5	(長さ)27.55 (幅)1.55 (厚さ)1.55	上・下部に縦・横0.2cmほどの穿孔。	-	-	
16_41	11	板材	本製品	SK08	-	-	230.0	(長さ)23.35 (幅)9.25 (厚さ)1.4	一部欠損。全周的に均一の厚さになるように平らに削り出した。	-	-	
16_42	10	柱か	本製品	SK08	-	-	135.7	(長さ)13.0 (幅)7.25 (厚さ)2.85	上・下部欠損。縦・横2.0cmほどの穿孔。	-	-	
17_43	10	箸	本製品	SK08	-	-	4.9	(長さ)20.5 (直径)0.55	(直徑)0.55	上・下部先端欠損。	-	
17_44	10	箸	本製品	SK08	-	-	2.4	(長さ)10.95 (直径)0.6	(直徑)0.6	上・下部先端欠損。	-	
17_45	10	箸	本製品	SK08	I層	-	3.1	(長さ)12.75 (直徑)0.6	上部欠損。中心部に刃物による切り込み。下部先端を剥り削り出した。	-	-	
17_46	9	下鉢	本製品	SK08	-	-	126.5	(長さ)13.2 (幅)7.3 (厚さ最大)4.0	(幅)7.3 (厚さ最大)4.0 cmほどの円形。	-	-	
17_47	9	下鉢	本製品	SK08	-	-	(総重量) (複合時長さ)125.4 13.6	(幅)7.25 (厚さ最大)2.6	赤面と黒面。縦側欠損。縫合は伴1.0cmほどの円形。	-	-	
17_48	12	錐管	金属製品	SK08	-	-	4.1	(長さ)5.12 (直徑)最大0.85	雁首。火薬部分欠損。遡れし部分のみ。筋付有。	1700年代後半～1800年代初頭	-	
17_49	12	金具	金属製品	SK08	-	-	2.5	(縦)3.25 (横)2.75 (厚さ)0.45	径0.2～0.3cmほどの円形の穿孔9ヶ所。	-	-	
18_50	-	瓶	磁器	SK09	I層	肥前	19.8	(推定値)11.7 (推定値)7.8 (残存値)	内外透明釉で施釉。付口時に付着。内外乳頭で装飾。	17C後半	-	
18_51	-	蓋	磁器	SK09	I層	肥前	134.0	(推定値)20.2 (厚さ)5.2	(残存値)	17C後半以降	-	
18_52	-	瓶	磁器	SK09	I層	肥前	9.7	1.55	-	外側透明釉で施釉。胡蝶草文。	18C後半	-
18_53	-	瓶	磁器	SK09	I層	-	22.5	(推定値)3.6 (残存値)1.9	内側施釉。	18C後半以降	-	
18_54	-	瓶	磁器	SK09	I層	肥前	5.9	-	内側透明釉による装飾。	17C後半以降	-	
18_55	10	箸	木製品	SK09	I層	-	3.7	(長さ)20.15 (直径)0.5	型打成形。内外に透明釉で施釉。内側乳頭による装飾。	-	-	
18_56	12	錐管	金属製品	SK09	I層	-	3.9	(長さ)5.45 (直徑)0.75	吸い口。筋付有。	1750～1800年代中	-	
18_57	-	壺・瓶	陶器	SD10	I層	肥前	14.0	-	(残存値)5.1 黒輪付け。	-	-	
18_58	-	瓶	磁器	SD10	I層	肥前	45.0	-	(残存値)2.8 内外透明釉で施釉。内外に一二茎網目文。	1780～1860年代	-	
19_59	-	瓶	陶器	B区	耕土	-	17.2	-	-	白化粧土と模様による装飾。白化粧土毛筆毛。	1580～1650年代中	-
19_60	5	抹棒	陶器	B区	耕土	等	158.3	(推定値)13.6 (厚さ)19.3 (残存値)4.5	ロクア成形。高台なし。内側施釉。筋付口に0.2～0.5mm程の白色粒子含む。	-	-	
19_61	6	瓶	陶器	C区	II層上面	肥前	50.6	(推定値)10.55 (残存値)4.4	(残存値)3.15 ロクア成形。粘土目模み痕跡2つ。	1580～1610年代	-	
19_62	-	瓶	陶器	C区	I層	肥前	46.2	-	(残存値)2.6 外側施釉。内側縦縫隙を施釉。内面は素地に白化粧土を盛り腰で液状化に網目日本文。	1580～1610年代	-	
19_63	6	瓶	陶器	C区	II層上面	肥前	23.6	-	(残存値)2.1 高台を除き内側施釉。縫隙と透明釉分け分け。内面野山。	1600～1690年代	-	
19_64	-	鉢	陶器	C区	II層上面	肥前	28.3	-	(残存値)4.95 ロクア成形。高台無施釉。高台を除き内側黒墨は墨。	1600～1780年代	-	
20_65	-	碗	陶器	分布調査	耕土	肥前	170.1	(推定値)11.02 (厚さ)6.1	(残存値)4.55 大きな成形のあと削いでいる。全面に施釉。高台付口に黒墨の肌。	1640年代から	-	
20_66	5	罐	陶器	分布調査	耕土	肥前	1010	(残存値)27.9 (厚さ)11.0	(残存値)9.35 大きな成形のあと削いでいる。全面に施釉。高台付口に黒墨の肌。	1750～1800年代	-	
21_67	-	瓶	磁器	A区	I層	肥前	33.0	-	(残存値)2.2 系切て成形。型押彫り。筋付口。	19C中	-	
21_68	-	香炉か	磁器	A区	II層上面	肥前	41.1	(推定値)10.6 (厚さ)4.5	内外面被熱開窓。外面にコウモリと子団子。	19C中	-	
21_69	-	碗	磁器	B区	I層	-	69.4	(推定値)11.5 (厚さ)4.8	(残存値)4.85 内側施釉。薄手半球碗。	17C末以降	-	
21_70	-	碗	磁器	B区	I層	肥前	22.1	(推定値)10.6 (厚さ)4.4	内側施釉。外側二重網目文。内面一重網目文。	18C	-	
21_71	-	碗	磁器	B区	I層	肥前	38.4	-	(残存値)5.25 内側施釉。草花文。	1610～1690年代	-	
21_72	-	杯	磁器	B区	耕土	肥前	54.8	(残存値)7.45 (厚さ)4.0	(残存値)5.25 内側施釉。外側二重網目文。内面一重網目文。	1680～1740年代	-	
21_73	6	碗	磁器	B区	II層上面	肥前	34.7	-	(推定値)3.9 内側透明釉で施釉。外側二重網目文。内面一重網目文。裏面。見込みに菊文。	-	-	
21_74	-	杯	磁器	B区	I層	肥前	30.1	(残存値)6.05 (厚さ)2.1	(残存値)2.62 骨付き茶碗溝。内外施釉。外側乳頭で装飾。紅葉口。	18C後半～19C	-	
21_75	-	杯	磁器	B区	I層	肥前	57.7	(残存値)9.6 (厚さ)3.7	(残存値)5.0 見込み灰被り。内外施釉。	-	-	

第6表 掘出土遺物一覧表（3）

所蔵番号	回収番号	器種	種別	出土位置	度地	重量(g)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	年代	
22	76	6	皿	磁器	B区	1層	肥前	169.4	11.75	3.9	3.85 定期、足込み丸の目輪割足。内外 等く施釉。二重階格子文。波佐見。	18C 中葉
22	77	6	皿	磁器	B区	1層	肥前	65.6	(推定値) 10.2	3.9	(残存値) 2.65 足込蛇の目輪割足。高台を焼き内 外施釉。波佐見。	1680～1740 年代
22	78	-	皿	磁器	B区	1層	肥前	62.2	(推定値) 16.0	(推定値) 8.7	(残存値) 2.65 青磁。	17C 以降
22	79	6	皿	磁器	B区	1層	肥前	106	(推定値) 14.2	(推定値) 7.4	(残存値) 3.25 足込蛇の目輪割足。難消ぎ部分に 黒色の付着物。内外施釉。内面に 焼れた梅樹文。波佐見。くらわん か。	1680 年代以 降
23	80	-	皿	磁器	B区	1層	肥前	13.8	-	-	(残存値) 2.15 壓打ち成形。陽刻文。	1780～1860 年代
23	81	-	皿小	磁器	B区	1層	-	89.5	-	-	(残存値) 6.4 想打ち成形。内面に施釉。	18C 盆手
23	82	-	皿	磁器	B区	1層	肥前	18.4	-	(推定値) 3.3	(残存値) 1.8 内外施釉。足込灰被足。	-
23	83	-	蓋	磁器	B区	1層	肥前	19.4	-	-	(残存値) 3.45 内外仮足と装飾。	1750～1780 年代
23	84	-	碗	磁器	C区	1層	中国	35.1	(推定値) 11.8	(推定値) 5.9	(残存値) 6.45 笠形底部による装飾。 内外透明釉で施釉。付付きに移付 着及び縁の削れ。	17C 前半～ 中葉
23	85	-	碗	磁器	C区	Ⅱ層上面	肥前	27.7	(推定値) 10.1	(推定値) 6.4	(残存値) 4.0 内外施釉。外面に「大明年製」。 青花文。	18C 前半以降
23	86	6	碗	磁器	C区	1層	肥前	34.6	(推定値) 8.65	(推定値) 4.4	(残存値) 2.95 内外透明釉で施釉。口縁に口紅 装飾。	17C 後手
23	87	-	碗	磁器	C区	1層	肥前	5.3	-	-	(残存値) 3.3 内外透明釉で施釉。外側は紙貼りで装飾。	1690 年代～ 1780 年代
23	88	-	碗	磁器	C区	1層	肥前	23.0	(残存値) 8.8	(推定値) 8.8	(残存値) 3.05 内外透明釉で施釉。付付きに移付 着。	1610 年代以 降
23	89	-	碗	磁器	C区	Ⅱ層上面	肥前	46.7	(推定値) 9.4	(推定値) 3.5	(残存値) 4.85 内外施釉。外側に二重網目文。波 佐見。	18C 中葉
23	90	6	碗	磁器	C区	Ⅱ層上面	肥前	29.8	-	(推定値) 4.1	(残存値) 3.5 内外透明釉で施釉。外側に人物圖。 足込込み草花文。高台部分に銀 装飾。裏絵。	1690～1780 年代
23	91	-	瓶	磁器	C区	1層	肥前	19.5	(推定値) 7.1	(推定値) 5.2	(残存値) 2.03 高台内黄色。内面無施。	-
24	92	-	碗小	磁器	分布調査 NO.15	表揮	肥前	16.2	-	-	(残存値) 4.05 内外透明釉で施釉。外側に二重網 目文。波佐見。くらわんか。	18C 小
24	93	6	碗	磁器	分布調査 NO.1	表揮	肥前	23.8	(残存部最大) 10.2	(推定値) 3.8	(残存値) 3.7 内外透明釉で施釉。裏絵。水翼文。 青花文。	1760～1780 年代
24	94	-	碗	磁器	分布調査 NO.5	Ⅱ層上面	肥前	21.2	(推定値) 8.6	(残存部最小) 4.6	(残存値) 5.25 内外透明釉で施釉。長型圖。	18C 後半以降
24	95	-	杯	磁器	分布調査 NO.7	表揮	肥前	32.4	5.25	2.7	2.75 内外透明釉で施釉。外面に彫れた 移し状の文様。紅唐口。	18C 後手
24	96	6	皿	磁器	分布調査 NO.7	表揮	肥前	29.8	(残存部最大) 10.6	(推定値) 5.0	(残存値) 2.08 青磁。付付き難調足。足込込みの 口紅割足。内面無施。	-
24	97	6	皿	磁器	分布調査 NO.15	表揮	肥前	90.6	(推定値) 13.2	(推定値) 8.1	(残存値) 3.7 内外透明釉で施釉。裏絵。五瓣花文。 青花文。	18C 以降
24	98	-	皿	磁器	分布調査 NO.1W	表揮	肥前	94.5	(推定値) 13.9	(推定値) 8.0	(残存値) 4.45 内外透明釉で施釉。足込込みに ショット印押五瓣花文。裏絵。	1750 年代以 降
24	99	6	皿	磁器	分布調査 NO.1W	表揮	肥前	58.9	(推定値) 12.2	(推定値) 6.7	(残存値) 3.37 内外透明釉で施釉。外側に彫れた 唐草文。	18C
24	100	-	皿	磁器	分布調査 NO.15	表揮	肥前	47.4	-	-	(残存値) 3.7 内外透明釉で施釉。裏絵。	18C
25	101	-	碗	土器	B区	鉢上	-	14.7	-	-	(残存値) 3.4 クロコ形。	近世
25	102	-	不明	土器	B区	鉢上	-	38.6	-	-	(残存値) 4.0 クロコ形。	近世
26	103	9	下駄	木製品	A区	鉢上	-	137.9	(長さ) 18.1	(幅) 8.05 (厚さ) 1.85	通す下駄。のめり。縫孔は幅0.7cm × 1.5cmの細孔。縫合穿孔は幅1.0cm の円形。板孔。	-
26	104	7	七輪	土製品	B区	鉢上	-	161.5	(長さ) 13.2	(直径) 11.95 (厚さ) 1.05	一部欠損。七輪の一部。	-
26	105	7	七輪	土製品	分布調査 NO.1	鉢上	-	154.9	(長さ) 8.55	-	全体的に被熱。七輪の一部。	-
26	106	8	鏡	石製品	B区	鉢上	-	276.2	(縦) 13.65 (横) 7.4	(厚さ) 1.82	一部欠損。亀板岩製か。墨付着。 「正和六年 月日」印、「製油」。 精形に「家」自「佐藤」と「一二三」 の文字。	-
27	107	5	瓶	陶器	SK06	1層	-	1430.0	3.1	9.9	36.7 具輪文字。底を斜めて全面透明 釉で施釉。亀甲に「日和」印、「製油」。 精形に「家」自「佐藤」と「一二三」 の文字。	近代以降
27	108	10	枕	木製品	SK06	1層	-	183.9	(長さ) 18.4	(幅) 5.4 (厚さ) 3.15	一部を明らかに削り出している。	-
27	109	11	板材	木製品	SK06	1層	-	300.0	(長さ) 23.95	(幅) 14.75 (厚さ) 1.1	全体的に均一の厚さになるように 手間に削り出している。	-
27	110	12	金具	金属製品	SK06	1層	-	20.2	(全長×高さ) 3.2	(幅) 6.75 (直径) 0.4	全体的に新付着。	-
-	111	12	ガラス瓶	ガラス製品	分布調査 NO.1	鉢上	-	36.6	(長さ) 1.9	(直径) 2.6 (直径最大値) 2.6	「赤祖水」。化粧水瓶か。	-

第4章 理化学的分析

第1節 花粉分析・種実同定・骨同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

代官小路遺跡（秋田県由利本荘市裏尾崎に所在）は、子吉川の左岸、河岸段丘上に位置する。これまでの発掘調査により、近世の土坑、溝跡などの遺構や陶磁器などの遺物が確認されている。

本分析調査では、近世及び近世以前の各層について花粉分析を行い周辺の植生について検討し、また近世の土坑から出土した種実、及び近世生活面直下の盛土層から出土した骨について種類を明らかにする。

2 試料

花粉分析を行う試料は、C区深掘Ⅲ層、V層、VI層から採取された土壤3点である。種実同定は、SK08_1層及び北側、SK09_1層から採取された種実遺体12点である。骨同定は、C区Ⅱ上層から出土した骨1点である。試料及び分析項目の一覧を第7表に示す。

第7表 分析試料及び分析項目一覧

No.	出土地点	状態	花粉分析	種実同定	骨同定
1	C区深掘Ⅲ層	土壤	1		
2	C区深掘V層	土壤	1		
3	C区深掘VI層	土壤	1		
4	SK08_1層	種子		1	
5	SK08_北側	種子		7	
6	SK09_1層	種子		4	
7	C区Ⅱ上層	骨			1
合計			3	12	1

3 分析方法

(1) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉（島倉1973）、中村（中村1980）、三好ほか（三好ほか2011）等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

(2) 種実同定

試料を双眼実体顕微鏡で観察する。同定は、現生標本や石川（石川1994）、中山ほか（中山ほか2010）、鈴木ほか（鈴木ほか2012）等を参考に実施する。結果は、部位・状態別の個数を一覧表で示す。また、各分類群の写真を添付し、状態良好な種実遺体の大きさをデジタルノギスで計測した結果や特徴等を一覧表に併記して同定根拠とする。

分析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れ、約70%のエタノール溶液で液浸保存する。

(3) 骨同定

試料を肉眼で観察し、形態的特徴から種及び部位を同定する。なお、試料が水漬け状態であったため、観察後、水溶性アクリル樹脂を含浸させた後、自然乾燥させて効果処理を行う。

4 結果**(1) 花粉分析**

結果を第8表に示す。C区深掘りのⅢ層、V層、VI層のいずれの試料からも、花粉化石はほとんど検出されず、シダ類胞子がやや多く認められる程度である。わずかに検出された花粉化石の保存状態は悪く、いずれも花粉外膜が破損、溶解していた。

検出された花粉化石は、木本花粉のツガ属、マツ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属、ハンノキ属、草本花粉のイネ科、サナエタデ節—ウナギツカミ節、ヨモギ属、キク亜科等である。

第8表 花粉分析結果

種類	C区深掘		
	Ⅲ層 1	V層 2	VI層 3
木本花粉			
ツガ属	1	-	-
マツ属	1	1	1
スギ属	-	1	1
コナラ属コナラ亜属	-	1	-
ハンノキ属	1	1	-
草本花粉			
イネ科	1	6	2
サナエタデ節—ウナギツカミ節	-	-	1
ヨモギ属	-	1	2
キク亜科	-	-	1
シダ類胞子			
シダ類胞子	49	90	89
合計			
木本花粉	3	4	2
草本花粉	1	7	6
シダ類胞子	49	90	89
合計	53	101	97

(2) 種実同定

結果を第9表に示す。また、種実遺体各分類群の写真を図版に、主な分類群の計測値や特徴等を第9表に示して同定根拠とする。

3試料を通じて、裸子植物1分類群（針葉樹のマツ属複雑管束亜属）2個、被子植物6分類群（広葉樹のオニグルミ、アンズ、ウメ、スマモ、モモ、草本のニホンカボチャ近似種）10個、計12個に同定された。

種実遺体の保存状態は、縫合線周囲や隔壁を欠損したオニグルミを除いて良好である。

栽培種は、SK08_北側よりアンズ1個、ウメ1個、モモ2個、ニホンカボチャ近似種1個と、SK09_1層よりスマモ3個、モモ1個の、計9個が確認された。

栽培種を除いた分類群は、SK08_北側より常緑針葉樹で高木になるマツ属複雑管束亜属の球果1個、種鱗1個と、SK08_1層より落葉広葉樹で高木になるオニグルミ1個の、計3個が確認された。

以下、栽培種の形態的特徴等を述べる。

・アンズ (*Prunus armeniaca* L.) バラ科サクラン属

核（内果皮）は灰褐色、レンズ状球体で頂部は鈍頭、基部は切形で中央部に溝入した跡がある。1本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線に鈍稜、腹面正中線はスマモよりもやや鋭い稜となり、稜の左右に浅い縦溝が各1個配列する。内果皮は厚く硬く、表面には浅く微細な凹点が網目模様をなす。

・ウメ (*Prunus mume* (Sieb.) Sieb. et Zucc.) バラ科サクラン属

核（内果皮）は灰褐色、やや扁平な広楕円体。表面には円形の小凹点が分布する。出土核は破片で、刃物等による切断痕がみられる。

・スマモ (*Prunus salicina* Lindley) バラ科サクラン属

核（内果皮）は灰褐色、レンズ状広楕円体。頂部はやや尖り、基部は切形で丸い騎点がある。1本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮表面は平滑でごく浅い凹みが不規則にみられる。

SK09_1層の半分2個は、縫合線に沿って割れており、接合し完形1個体となる。接合した計測値は、長さ16.07mm、幅12.02mm、厚さ7.87mmである。半剖内面には種子1個が入る広卵状の窪みがある。

・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラン属

核（内果皮）は灰褐色、長さ24.7~29.8mm、幅17.5~20.4mm、厚さ13.6~14.4mm程度のやや扁平な広楕円体で頂部は尖る。表面には縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、粗いしわ状に見える。縫合線に沿って半分に割れた内面には種子1個が入る広卵状の窪みがある。SK08_北側 (No.5) の完形核は、長さ26.37mm、幅19.34mm、厚さ13.59mmを測り、頂部は尖る。

・ニホンカボチャ近似種 (*Cucurbita cf. moschata* Duch.) ウリ科カボチャ属

種子は淡灰褐色、残存長13.67mm、幅8.16mm、厚さ1.10mmの偏平な倒卵形体。基部は突出し發芽孔がある。両面全周に走る縁は明瞭で、段差があり薄くなる。種皮表面は平滑。

カボチャ（属）は、栽培のために持ち込まれた渡来種で、日本で栽培しているカボチャは、16世紀に渡来したニホンカボチャ、19世紀に渡来したセイヨウカボチャ (*C. maxima* Duch.)、セイヨウカボチャよりさらに後れて渡来したペポカボチャ (*C. pepo* L.) の3種がある。ただし、山形県小山崎遺跡からは、縄文時代前期前葉の年代値 (5,578±24y BP) が得られたカボチャ近似種の種子が出土

しており（吉川2015）、渡来時期には議論の余地がある。SK08_北側の種子は、ニホンカボチャの形状に似るため、近似種を付している。

第9表 種実同定結果

No.	出土地点	分類群	部位	状態	個数	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考
4	SK08_1層	オニグルミ	核	破片	1	-	27.06 +	-	下半部、隔壁欠損
5	SK08_北側	マツ属複雑管束亞属	球果	完形未満	1	66.04	32.45 +	-	基部欠損
			種鱗	完形未満	1	13.53 +	-	-	
		アンズ	核	完形未満	1	18.80 +	22.37	10.70 +	上半部欠損
		ウメ	核	破片	1	18.95 +	19.27 +	-	刃物等による切断痕
		モモ	核	完形	1	26.37	19.34	13.59	頂部尖る
				破片	1	29.81	20.37 +	7.20 +	頂部鋸く尖る、半分厚
		ニホンカボチャ近似種	種子	完形未満	1	13.67 +	8.16	1.10	頂部欠損
6	SK09_1層	スマモ	核	半分	2	16.07	12.02	7.87	接合し完形1個
				破片	1	14.35 +	-	-	食痕
		モモ	核	半分	1	24.73 +	17.46	7.18	頂部尖り先端僅かに欠損、半分厚

1)計測はデジタルノギスを使用し、欠損は残存値に「+」で示す。

(3) 骨同定

同定の結果、検出された骨は、ウシ目 (Artiodactyla) イノシシ科 (Suidae) イノシシ属 (Sus) の左上腕骨の遠位端の破片である。遠位骨端は、未化骨で外れる。

5 考察

(1) 古植物

C区深掘のVI層、V層及びIII層について花粉分析を実施した結果、いずれも花粉化石の産出状況が悪く、近世及び近世以前の各層について周辺植生推定を行うことが困難であった（図版13）。一般的に、花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている（中村1967、徳永・山内1971、三宅・中越1998等）。検出された花粉化石は、いずれも花粉外膜が破損あるいは溶解しており、検出された種類も分解に強い種類や、ある程度分解の影響を受けても同定可能な種類が検出されている。また、分解に強いシダ類胞子も多く認められていることも考慮すると、堆積後の経年変化により、取り込まれた花粉やシダ類胞子が分解されたと推定される。

なお、検出された種類から、ツガ属、マツ属、スギ属等の針葉樹、コナラ属コナラ亜属、ハンノキ属等の落葉広葉樹が当時の遺跡周辺に生育していたと考えられる。特にハンノキ属は、子吉川の河畔や低湿地などの適湿地に生育していた可能性もある。また、イネ科、サナエタデ節—ウナギツカミ節、ヨモギ属、キク亜科などの草本類は、いずれも開けた明るい場所に生育する種を含むことから、当時の調査地周辺の草地や林縁などに由来すると思われる。

(2) 植物利用

近世の土坑より得られた種実遺体群は、木本6分類群（マツ属複雑管束亜属、オニグルミ、アンズ、ウメ、スマモ、モモ）、草本1分類群（ニホンカボチャ近似種）から成り、栽培種を主体とする組成が確認された（図版14）。

SK08より確認された果樹のアンズ、ウメ、SK08、SK09より確認されたモモ、SK09より確認

されたスモモ、S K08より確認された果葉類のニホンカボチャ近似種は、代官小路遺跡近辺で栽培されたか、持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食料と示唆され、土坑内への投棄等の行為に由来する可能性がある。秋田県内における種実出土事例では、秋田市古川堀反町遺跡の近世の廃棄土坑や溝跡より、アンズを除く分類群が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社2008）。

一方、栽培種を除いた分類群は、S K08より常緑針葉樹のマツ属複雑管束亞属、落葉広葉樹で河畔林要素のオニグルミが確認された。植栽の可能性を含めて周辺に生育していたと考えられる。また、堅果類のオニグルミは、核内部の子葉が食用可能である。出土核は、上述の栽培種よりも保存状態が不良で、縫合線周囲や隔壁を欠損することから、人が食用のために核を叩き割り、内部の子葉を取り出した打撲痕の可能性がある。

（3）動物利用

近世の生活面直下の盛土層から検出された骨は、イノシシ属の左上腕骨であった（図版13）。イノシシ属にはイノシシ、ブタが含まれているためイノシシ属にとどめているが、時代的な面を考慮するとブタの可能性がある。近位端が欠損し、遠位端側が残るが、遠位端の骨端は未化骨で外れている。イノシシ属の上腕骨遠位端部が化骨化する時期は、1.5ヶ月齢であることから、それよりも若い個体と判断される。おそらくは、食料資源等として利用された後、廃棄されたものに由来すると考えられる。

引用文献

- 石川茂雄 「原色日本植物種子写真図鑑」 石川茂雄図鑑刊行委員会 1994（平成6）年 328頁
 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文 「ネイチャーウォッキングガイドブック草本の種子と果実一形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種一」 誠文堂新光社 2012（平成24）年 272頁
 島倉巳三郎 「日本植物の花粉形態 大阪市立自然科学博物館収蔵目録」 第5集 1973（昭和48）年 60頁
 徳永重元・山内輝子 「花粉・胞子・化石の研究法」 共立出版株式会社 1971（昭和46）年 50-73頁
 中村 純 「花粉分析」 古今書院 1967（昭和42）年 232頁
 中村 純 「日本産花粉の標識 I II（国版）」「大阪市立自然史博物館収蔵資料目録」 第12, 13集 1980（昭和55）年 91頁
 中山至大・井口希秀・南谷忠志 「日本植物種子図鑑（2010年改訂版）」 東北大学出版会 2010（平成22）年 678頁
 パリノ・サーヴェイ株式会社 「古川堀反町遺跡の自然科学的分析 古川堀反町遺跡—秋田中央警察署改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—秋田県文化財調査報告書第435集」 秋田県埋蔵文化財センター 2008（平成20）年 224-242頁
 三宅 尚・中越信和 「森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態」「植生史研究」 1998（平成10）年 6.15-30頁
 三好教夫・藤本利之・木村裕子 「日本産花粉図鑑」 北海道大学出版会 2011（平成23）年 824頁
 吉川純子 「植物遺体・小山崎遺跡発掘調査報告書—総括編一、遊佐町埋蔵文化財調査報告書第10集」 遊佐町教育委員会 2015（平成27）年 162-165頁

第2節 樹種同定

(株) 吉田生物研究所

1 試料

試料は秋田県代官小路遺跡から出土した木製品6点である。

2 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3 結果

樹種同定結果（針葉樹2種、広葉樹4種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don) (遺物No. 6) (図版16、写真No. 6)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1~3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

2) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujopsis* sp.) (遺物No. 3) (図版15、写真No. 3)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが、顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

3) ニレ科ケヤキ属ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino) (遺物No. 2) (図版15、写真No. 2)

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管（~270 μm）が1列で孔圈部を形成している。孔圈外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集團管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圈部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している（イニシアル柔組織）。放射組織は1~数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は單穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の1~3列のものと大部分を占める6~7細胞列のほぼ大きさの一様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

4) モクレン科モクレン属 (*Magnolia* sp.) (遺物No. 5) (図版16、写真No. 5)

散孔材である。木口ではやや小さい道管（~110 μm）が単独ないし2~4個複合して多数分布する。軸方向柔組織は1~2層の幅で年輪界に配列する。柾目では道管は單穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなる同性と平伏と直立細胞からなる異性がある。

道管放射組織間壁孔は階段状である。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ～700μmとなっている。モクレン属はホオノキ、コブシなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

5) トチノキ科トチノキ属トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) (遺物No. 1) (図版15、写真No. 1)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(～80μm)が単独かあるいは2～4個放射方向に接する複合管孔を構成する。道管の大きさ、分布数とともに年輪中央部で大きく年輪界近辺ではやや小さくなる傾向がある。軸方向柔細胞は1～3細胞の幅で年輪の一番外側(ターミナル状)に配列する。柾目では道管は單穿孔と側壁に交互壁孔、螺旋肥厚を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は六角形をした比較的大きな壁孔が密に詰まって節状になっている(上下縁辺の1～2列の柔細胞に限られる)。板目では放射組織は單列で大半が高さ～300μmとなっている。それらは比較的大きさが揃って階層状に規則正しく配列しており、肉眼では微細な縞模様(リップルマーク)として見られる。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。

6) ウコギ科ハリギリ属ハリギリ (*Kalopanax septemlobus* Koidz.) (遺物No. 4) (図版16、写真No. 4)

環孔材である。木口ではほぼ単独の大道管(～350μm)が孔圈部を形成している。孔圈外では小道管が集団状、波状、帯状に複合して分布している。柾目では道管は單穿孔を有し、内部には充填物(チロース)がつまっている。放射組織は平状細胞からなる同性と平伏、直立細胞からなる異性がある。板目では放射組織は1～5細胞列、高さ～1.6mmからなる。ハリギリは北海道、本州、四国、九州に分布する。

第10表 樹種同定結果

No.	器種	樹種	図
1	木胎漆器	トチノキ科トチノキ属トチノキ	図版15 No-1
2	木胎漆器	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	図版15 No-2
3	右近下駄	ヒノキ科アスナロ属	図版15 No-3
4	連歛下駄	ウコギ科ハリギリ属ハリギリ	図版16 No-4、第17図46
5	差歛下駄	モクレン科モクレン属	図版16 No-5、第17図47
6	紡錘車	スギ科スギ属スギ	図版16 No-6、第16図37

参考文献

奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所史料第27番木器集成図録近畿古代篇」 1985(昭和60)年

奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所史料第36番木器集成図録近畿原始篇」 1993(平成5)年

伊東隆夫 「日本産広葉樹の解剖学的記載Ⅰ～V」 京都大学木質科学研究所 1999(平成11)年

北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社 1979(昭和54)年

島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品叢覧」 雄山閣出版 1988(昭和63)年

林 昭三 「日本産木材顕微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所 1991(平成3)年

使用顕微鏡

Nikon DS-Fil

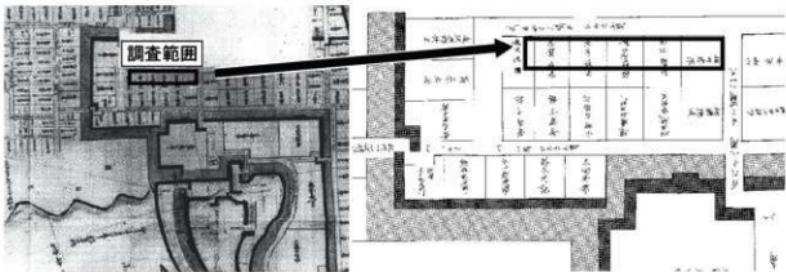
第5章 総括

絵図にみる近世における代官小路遺跡の変遷

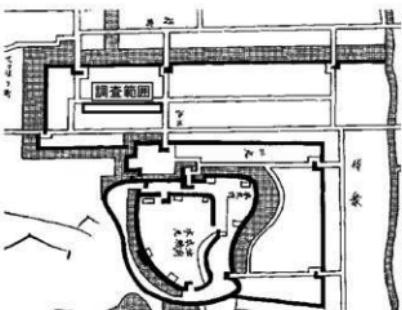
代官小路遺跡が位置する本荘城下を描いた絵図は複数現存する。ここでは、以下の①～⑥の各絵図中に遺跡範囲を示した上で、近世本荘城下におけるこの場所の変遷を追った。なお、各絵図中の調査範囲については、本荘城冠木門から北へ延びる道路と遺跡範囲の北西側に位置する大門の道路が、現存の代官小路遺跡付近の道路状況と変化がないことを前提にして設定した。

①『本城城下絵図』：1615（慶長20）年～1622（元和8）年（第28図）

本絵図は、欠損部分が数か所あるため、城下の全体像は不明だが、本遺跡付近の様相は確認することは可能である。慶長年間に本城満茂が入部し、本荘城及び城下として整備された頃には、郭内には侍衆の屋敷が立ち並び、町屋はすべて郭外に配置されていた。当時期は、郭内と郭外との区別は堀により判然としており、本遺跡の場所は郭内に位置していることが分かる。また、絵図には居住者の氏名も書き込まれ、調査範囲には6名の屋敷があったことが分かる。郭内のなかでも、城に近い場所に居住していた6名は、本城氏家中において中核をなす家臣であると考えられている（本荘市1987）。



第28図 本城城下絵図（『本荘市史史料編Ⅰ上』を一部改編）



第29図 白描本城城下絵図（『本荘市史史料編Ⅰ上』を一部改編）

②『白描本城城下絵図』：作成年不明（第29図）

本絵図は、①を参考に描かれたとされ、①とほぼ同時期の城下の様相を知ることができる。

市史では、①と比較して、道路及び町割りが若干縮小していることを指摘している（本荘市1984）。また、①で見ることができる二の丸北側から東側の堀が表現されていない。居住者等について詳細な記載はなく、本遺跡周辺の詳細は不明であるが、①と同様に、本遺跡は郭内に位置している。

③『出羽之国油利之郡本城図（正保城絵図）』：1645（正保2）年（第30図）



本絵図には、居住者について詳細な記載はなく、本遺跡付近は「侍町」とのみ記載されている。そして、①や②と比較して、三の丸を形成する土塁や堀、水路が撤去または埋め立てられ、郭内が著しく縮小している。

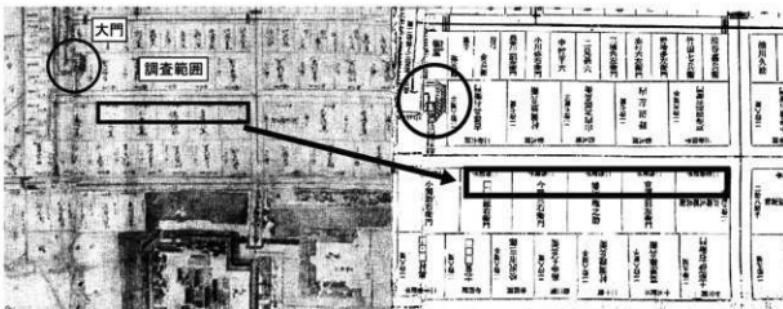
また、大手口の北から東への移動という変化がみられる。これは本城城退後との本城城破却を経て、六郷政乗転封に際し、2万石の領地高に見合うように本荘城の城郭及び城下が縮小されたためである。これにより本遺跡は郭外に位置することとなった。

第30図 出羽之国油利之郡本城図（『本荘の歴史普及版』より一部改編）

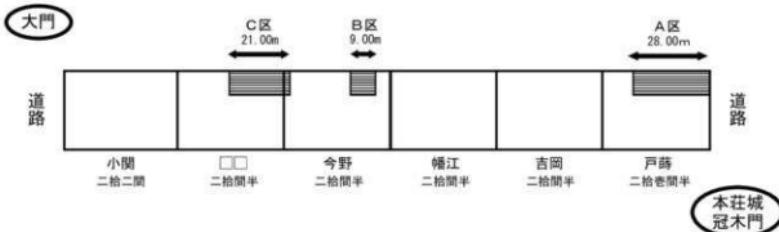
④『貞享四年本荘絵図』：1687（貞享4）年（第31図）

本絵図は、城郭とそれを中心とした屋敷割や城下の支配に関わる施設を描くことを目的として作られたと考えられているもので（本荘市2003）、全部で451軒について書き込みがある。本遺跡付近も居住者名と各屋敷の間口の長さが記されている。

各調査区が絵図のどこにあたるかを検討するため、絵図に示された間口の長さを元に、調査区東際が当時の道路に接しているという前提で模式図を作成した（第32図）。なお、1間は1.82mとして計算した。各調査区の範囲を当てはめてみると、A区は戸蔵家、B区は今野家、C区は今野家と□□家にあたると推測される。



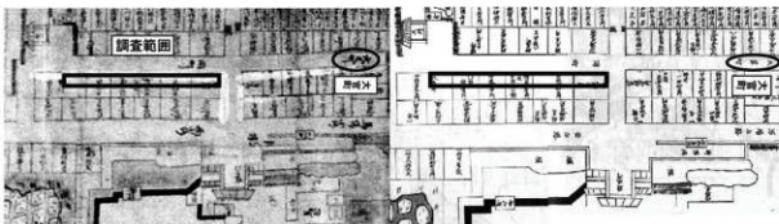
第31図 貞享四年本荘絵図（『本荘の歴史普及版』より一部改編）



第32図 調査範囲模式図

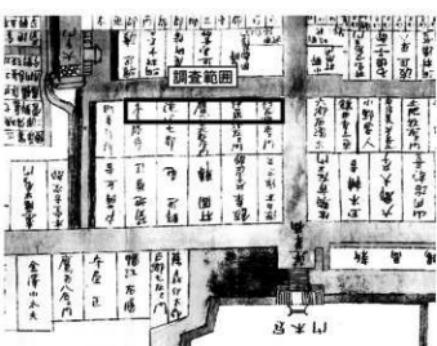
⑤「本荘城下絵図」：享保頃（18世紀初頭）（第33図）

本絵図も居住者名が書き込まれ、調査範囲には6名の屋敷があったことが分かる。また、「大官町」という書き込みが確認できる。これが転じて江戸時代末期には「代官小路」と呼ばれるようになったと考えられる。



第33図 本荘城下絵図（『本荘市史史料編III』を一部改編）

⑥「奉還当時之本荘藩家中地割図」：江戸時代末（第34図）



第34図 奉還当時之本荘藩家中地割図（本荘郷土資料館蔵を一部改編）

本絵図にも各屋敷の居住者として5名の姓氏が書き込まれており、大門に近い西端には、町奉行所が置かれていることが分かる。

以上、絵図を参考に、近世における代官小路遺跡の遺跡範囲の変遷を辿ってきた。

③の時期に郭内から郭外へという変化はあったが、どの時期においても屋敷が立ち並ぶ居住地であったことが分かる。

なお、調査範囲をより正確に絵図内で示すためには、冠木門の北側を南北方向に延びる現道の地下を発掘調査し、当時の道路線を確定させる必要がある。

遺構・遺物の特徴

今回の調査で、江戸時代の土坑を6基検出した。そのうちSK03・04・05・08・09からは、陶磁器や木製品、金属製品、石製品等の遺物が出土した。SK04は、この時期の様相が描かれた「本荘城下絵図」によれば、野辺浦右衛門の敷地内に掘られた土坑と考えられる。長軸2.04m、短軸1.00m、深さ0.5mで、底面が平坦であるため、中で何らかの作業が行われたと考えられる。由利本荘市教育委員会が実施した本荘城跡本丸の調査では、一辺が数mの隅丸方形や長方形の底面が平坦な土坑を11基検出しており、地下室や貯蔵施設の可能性が指摘されている。また、SK05はSK04に切られており、17世紀半ばから後半の陶器皿が出土していることから、SK04よりも古い時期のものである。SK03は、出土した遺物から18世紀以降の廃絶と考えられる。SK08・09からはアンズ、ウメ、モモ、スモモ、ニホンカボチャ近似種といった植物遺体が出土している。これらは食料として利用された後、土坑内へ投棄されたものと推測されることから、SK08・09はいずれも屋敷の庭に掘られたゴミ穴として機能していたと考えられる。廃絶時期については、SK08は18世紀後半、SK09は18世紀半ばから19世紀と考えられる。また、絵図から推測すると、A区の調査位置は屋敷の側面部であると考えられる。

遺物については、陶磁器は合わせて82点掲載した。陶器は23点あり、内訳は皿9点・碗3点・壺あるいは甕3点・瓶2点・鉢4点・擂鉢2点。磁器は59点あり、内訳は皿24点・碗20点・瓶4点の他、杯5点や香炉2点、蓋2点、筒型1点、不明1点である。出土した陶磁器の大半は、17世紀中葉から18世紀後半のものである。肥前産の陶磁器が大半を占める中、遺構内・外から景徳鎮が1点ずつ出土し、1650～1690年代と考えられる堺産擂鉢が1点出土した。本遺跡出土の近世陶磁器は、大量生産品である、所謂「くらわんか」から第18回51の蓋のような手の込んだ染付まで出土しており、製品の質の幅が広い。

陶磁器以外では、正徳6（1716）年と刻まれた硯が出土している。硯は、「高島石」と刻まれていることから、高島硯と考えられる。高島硯は滋賀県阿弥陀山産の粘板岩を素材として、現在の滋賀県高島市で大溝藩の専用品とされ、江戸・明治・大正時代にわたり隆盛を誇り、仙台の雄勝硯、山口の赤間硯等と並ぶ名硯の一つである。その流通は広く、北は北海道、南は九州の遺跡で出土している（垣内1994）。県内では秋田市東根小屋町遺跡から「高島石」と刻書された縦11.7cm、横6.1cm、厚さ1.4cmの硯が1点出土している（秋田県教育委員会1994）。この他、刻書のある硯は、岩渕藏遺跡からも出土しており、背面に「佐藤丈助」と刻書されている（由利本荘市教育委員会2015）。硯は他の文房具と比較して文字が刻まれる割合が高いといわれ、主に所有者名や入手時期、产地が刻まれる。これは、所有者の嗜好に基づいて様式化された自己表現の対象であったといわれている（長佐古2013）。当遺跡で出土した硯の刻書も、所有者によるものである可能性がある。

SK06からは大正から昭和初期に使用されたと考えられる陶製の醤油瓶が出土している。ここで、醤油瓶に鉄軸で書かれた文字からその由来を探ってみたい。文字は縦書きで「（亀甲）日和」、「醤油」、「（桙形）榮」、「佐藤」、「二三二」（第27回107）とある。昭和5年に山形県の酒田商工会議所が発行した「酒田商工案内」に、酒田醤油株式会社が「（亀甲）日和」と印刷された広告を掲載しており（酒田商工会議所1930）、「日和」印は醤油の銘柄を示していると考えられる。また、「佐藤」の文字は、本荘時報社が明治35年及び大正14年に発行した「本荘案内」において「佐藤醤油

店」が記録されており（菊池1902、本荘時報社1925）、小売店の名前と考えられる。ゆえに、この醤油瓶は、佐藤醤油店が「（亀甲）日和」を量り売りするための容器として使っていた瓶で、不用品として遺棄され、逆位に埋められたと考えられる。

これら遺構・遺物は、B及びC区においては、厚さ1mの地業層上面で見つかった。この地業は、本城満茂入部當時、城普請当初になされたもので、軟弱な地盤の子吉川沖積地に町の基礎を作るための地盤改良と考えられる。岩渕藏遺跡では、地業層の下に平安時代の生活面が存在し、多くの遺構・遺物が見つかっている（由利本荘市教育委員会2015）。本遺跡でも、造成土中から平安時代の土師器・須恵器の小片が出土したが、遺構等の生活痕跡は見つからなかった。

今回の調査で得られた遺構・遺物は、当地における生活復元や流行・消費活動の解明のための重要な資料である。今後の更なる調査・研究が必要と考える。

参考文献

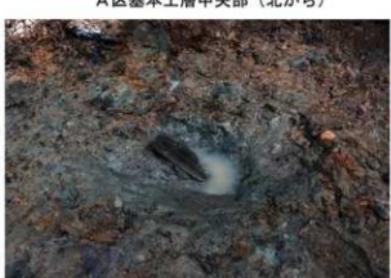
- 秋田県教育委員会 「東根小屋町遺跡」 秋田県文化財調査報告書第387集 秋田県教育委員会 2005（平成17）年
本荘市 「本荘市史 史料編Ⅰ上」 1984（昭和59）年
本荘市 「本荘市史 史料編Ⅲ」 1986（昭和61）年
本荘市 「本荘市史 通史編Ⅰ」 1987（昭和62）年
本荘市 「本荘市史 通史編Ⅱ」 1994（平成6）年
本荘市 「本荘の歴史 普及版」 2003（平成15）年
由利本荘市教育委員会 「本荘城跡一本丸の発掘調査」 2008（平成20）年
由利本荘市教育委員会 「岩渕藏遺跡」 由利本荘市文化財調査報告書第22集 2015（平成27）年
九州近世陶磁学会 「九州陶磁の福年一九州近世陶磁学会10周年記念ー」 九州近世陶磁学会 2000（平成12）年
酒田商工会議所 「酒田商工案内」 1930（昭和5）年
本荘時報社 「本荘案内」 1925（大正14）年
大橋康二 「考古学タイプライター55 肥前陶磁」 ニュー・サイエンス社 1989（平成元）年
垣内光次郎 「江州高鍋窯の生産」 「江戸時代の生産遺跡」 江戸遺跡研究会 1994（平成6）年 21-32頁
菊池宗吉 「本荘案内」 1902（明治35）年
堀内秀樹 「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」 「東京大学構内遺跡調査研究年報 1」 東京大学理蔵文化財調査室 1997（平成9）年 279-305頁
堀内秀樹 「江戸遺跡出土陶磁器の段階設定とその両期」 「竹下健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論文集」 竹下健二先生・澤田大多郎先生の還暦を祝う会 2000（平成12）年 213-232頁
長佐古真也 「文房具」「事典 江戸の暮らしの考古学」 吉川弘文館 2013（平成25）年 269-270頁



遺跡遠景（東から）



同上（北から）





SK 04・05完掘（西から）



B区調査前風景（西から）



B区近景（西から）



B区基本土層中央部（北から）



SK 06遺物出土状況（西から）



SK 06完掘（北から）



S X 07断面（北から）



B区盛土状況（南から）



C区調査前風景（東から）



C区近景（北東から）



C区基本土層東端部（南から）



C区盛土状況（南から）



SK08断面（北から）



SK08完掘（北から）



SK09完掘（北から）



SD10完掘（西から）



瓶



擂鉢

※写真中の番号は
挿図番号 - 遺物番号



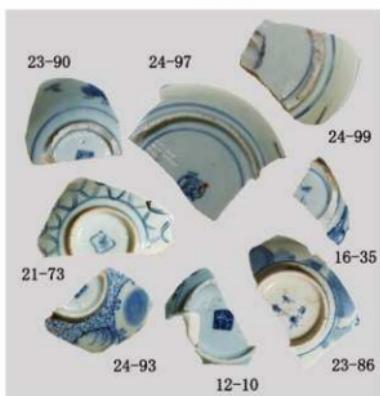
皿 見込み蛇の目釉剥ぎ



皿 胎土目



皿 蛇の目凹形高台



皿 コンニャク印判（五弁花文）



26-104



七輪

26-105



15-28

瓦



14-18



26-106

硯



26-103



17-47



17-46

下駄



14-19



16-38



14-20



16-39

下駄の歯



18-55

箸



16-42

柱



紡錘車

16-37

27-108

杭

16-40



27-109



板材

16-41



27-110



17-49

金属製品



18-56



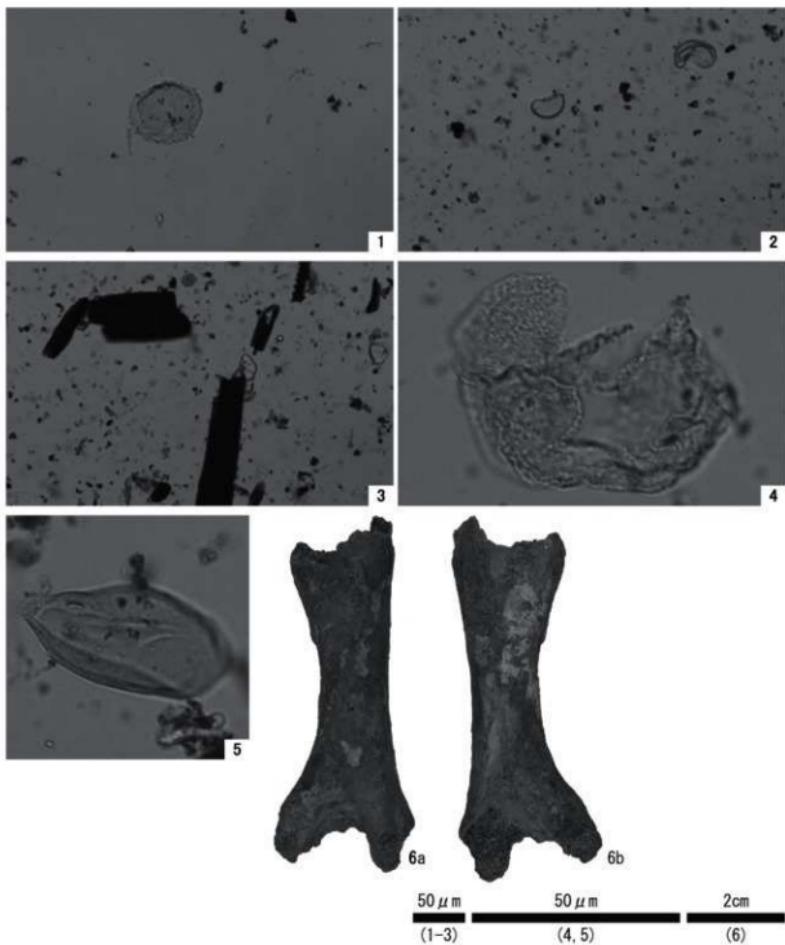
17-48



111

煙管

ガラス製瓶



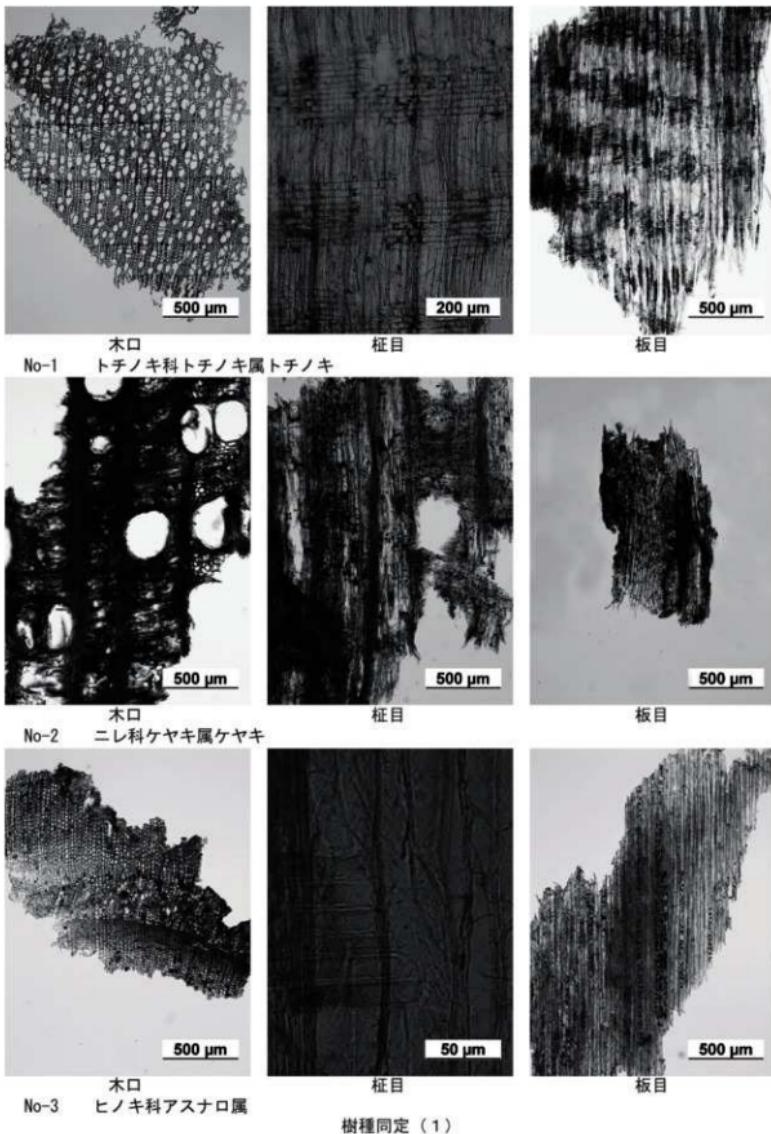
1. 花粉分析 プレバラート内の状況 (C区深堀III層:1)
2. 花粉分析 プレバラート内の状況 (C区深堀V層:2)
3. 花粉分析 プレバラート内の状況 (C区深堀VI層:3)
4. マツ属 (C区深堀III層:1)
5. イネ科 (C区深堀V層:2)
6. イノシシ属左上腕骨 (C区II上層:7)

花粉化石・出土骨

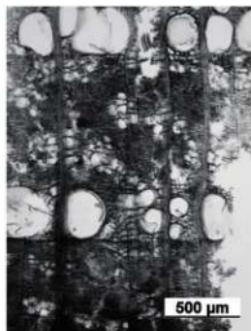


1. マツ属複維管束亞属 球果(SK08_北側:5)
3. アンズ 核(SK08_北側:5)
5. モモ 核(SK08_北側:5)
7. モモ 核(SK08_北側:5)
9. ニホンカボチャ近似種 種子(SK08_北側:5)

2. オニグルミ 核(SK08_1層(7/14):4)
4. ウメ 核(SK08_北側:5)
6. モモ 核(SK09_1層(7/14):6)
8. スモモ 核(SK09_1層(7/14):6)



樹種同定（1）



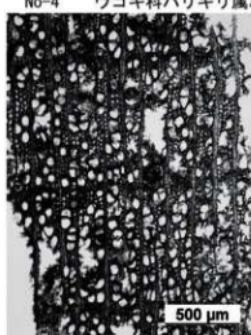
木口
No-4 ウコギ科ハリギリ属ハリギリ



柾目



板目



木口
No-5 モクレン科モクレン属



柾目



板目



木口
No-6 スギ科スギ属スギ



柾目



板目

樹種同定 (2)

報 告 書 抄 錄

秋田県文化財調査報告書第523集
代官小路遺跡
-地方街路交付金事業（停車場栄町線：裏尾崎町）
に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-

印刷・発行 令和4年3月
編 集 秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802 大仙市払田字牛嶋20番地
電話(0187)69-3331 FAX(0187)69-3330
発 行 秋田県教育委員会
〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号
電話(018)860-5193
印 刷 謄写堂印刷

